国見町

くにみ歴史本

～国見町の歴史、文化を探る～

～国見町の歴史、文化を探る～

くにみ歴史本

れきしほん

国見町

過去・現在・未来

多くの人が往来する

～歴史への誘い～

千年のまち国見

国見町では平成27年2月23日「国見町の歴史まちづくり計画」が国の認定を受けました。この計画認定を受け、長い歴史のなかで受け継がれてきた国見町の歴史・文化財・伝統芸能を未来へ伝えていくためにこの冊子を作成しました。

見つけよう！
キラキラ光る国見町のたからもの

国見町は、宮城県南域、山形県村山地域・置賜地域・福島県北地域の真ん中にあることから、古代より仙台・米沢（日本海側）へと北上する交通の要衝でした。現在もJR東北本線、東北自動車道、国道4号など、主要な交通網が発達しています。

平和と鎮魂を祈り続けた奥州藤原氏の平泉文化圏の南域にあたる国見町には、平安時代に構築された阿津賀志山防塁が現在も遺っています。鎌倉時代から戦国末期まで伊達氏が支配し、江戸時代以後は上杉氏や松平氏・幕府と変遷する中で奥州街道・羽州街道と宿駅が整備され、宿場町を中心ににぎわいを見せてきました。往時を偲ばせる建造物や伝統的な活動が現在も多数残されています。

また、国見町は平成27年(2015)に国の認定を受けた「国見町歴史的風致維持向上計画」により、この地に住む私たちが、この町の「誇り」を取り戻し、その思いを共有できるよう歴史を活かしたまちづくりに取り組んでいます。

この冊子は、町の歴史・文化財・伝統芸能など、町内のたからものを広く伝え、触れて、再認識していただくことで、国見町のたからものが100年先へ受け継がれていく力になることを願って作成しました。幾多の辛苦を乗り越えてきた歴史、伝統、原風景は、これからの未来を照らすたからです。知るほどに奥が深い国見トリップ。さあ、一緒に出かけましょう。

くにみ歴史本 ～国見町の歴史、文化を探る～

目次

第1章 国見の歴史 ―通史編―

原　始（旧石器時代・縄文時代・弥生時代）…… 8
古　代（古墳時代・奈良時代・平安時代）…… 12
中　世（鎌倉・南北朝・室町・戦国・安土桃山）…… 16
近　世（戦国・安土桃山・江戸）…… 18
近　代（明治・大正・昭和）…… 22
現　代（昭和・平成）…… 24
国見町の領主変遷・年表 …… 28
小学校のあゆみ …… 30
～未来へ向かって～ …… 32

第2章 くにみのたからもの

[エリア]
阿津賀志山防塁エリア
敵の進攻をさえぎる長大な要塞…34
阿津賀志山防塁の構造…35
合戦に至るまで…36　奥州合戦最大の激戦地となる…38
伊達氏による支配の始まり…39
防塁と関連文化財群を巡ってみよう…40
旧奥州街道エリア
旧奥州街道藤田宿…45
旧奥州街道藤田宿の見どころ…46
旧奥州街道貝田宿…49　旧貝田宿の名残…51
近代の鉄道遺構…52　貝田口留番所跡…53
秋葉神社と水雲神社…53
旧奥州道中国見峠長坂跡…54
旧羽州街道エリア
旧羽州街道小坂宿…57
旧羽州街道小坂峠道跡…58　伊達成宗墓…58
福源寺地蔵庵観音堂…59　旧小坂村産業組合石蔵…60
深山神社の大榧大藤…61　半田銀山二階平坑口跡…61
光明寺エリア
御瀧神社湧水と光明寺集落の水利用…63　御瀧神社…65
三常院…66　福聚寺と伊達朝宗夫人墓…66
[テーマ]
民俗芸能
1.内谷春日神社と太々神楽…68
2.祭礼の準備・神楽奉納…69
3.太々神楽の継承…70
祭　礼
1.鹿島神社と例大祭…72　2.例大祭の準備…73
3.前夜祭・例大祭…73　4.町内の祭り…76
産　業
1.国見町の産業…78　2.石蔵と石工技術…82
国見町指定等文化財一覧…86

この本の使い方

1 エリアとテーマに分かれています。気になるページからスタートしましょう！

「くにみ歴史本」は、国見町のたからものをエリアごとに分けた章と、民俗芸能、祭礼、産業などテーマごとに分けた章と、大きく2つに分かれています。気になることや場所が見つかったら出発です。

2 お立ち寄りマップを開いて歩いてみよう！

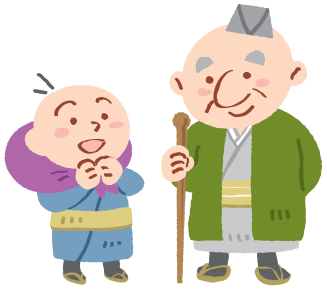
目的地に着いたらぜひ周辺も歩いてみよう。季節ごとに変わる空の色、風の匂い、水の音など、歩くからこそ見えてくる国見町の魅力に触れることができますよ。

3 気づき、発見をどんどん書き足して行こう！

近くで鳴いていた野鳥、飛んでいた昆虫、咲いていた花、地元の人に教わったことなど、訪ねた先で知ったことや発見したこと、逆にもっと知りたくなったことなどは必ずメモに残しましょう。惜しみなく「くにみ歴史本」に書き足していきましょう。

4 分かるほどに豊かになります

「くにみ歴史本」で紹介していることは、国見町の歴史の入り口です。もっと知りたくなったら地元の人に聞いたり、図書館やネットで調べたりして掘り下げていきましょう。知るほど、分かるほどに国見町の物語は、豊かになり、語り継ぐ力になっていきます。



第1章

国見の歴史 ―通史編―

原　始（旧石器時代・縄文時代・弥生時代）

縄文土器が出現する以前、人類が主な道具として打製石器を使っていた時代を旧石器時代（約260万年前～15,000年前頃）と呼んでいます。現段階において、日本列島で発見された最も古い旧石器は10万年前頃のものです。その頃の人々は、氷河期という環境の中で家を持たず、石や骨などから道具を作り、狩猟や植物を採取し移動しながら生活していました。

滝沢遺跡で出土した石刃

国見町では、旧石器時代後期の遺跡として滝沢遺跡（大字光明寺・2万年前頃）が知られています。出土したのは、狩猟や植物を刈るのに使うナイフ形石器を作るための石刃と呼ばれる素材です。旧石器時代は石の性質を理解し、鋭利な刃部を作り出すことが得意でした。また、阿津賀志山防塁国道4号北側地区でも、旧石器時代に使われていたと思われる細石刃が出土しており、旧石器時代の営みが継続していたと考えられます。

縄文時代になると、新たに磨製石器や弓矢、土器などが発明されました。この時代は、気候が温暖になったこともあり、食糧も移動せずに狩猟採集や栽培によって確保できるようになりました。人々は土器を使用して食べ物を煮炊きするようになり、村（集落）を作って竪穴住居での定住生活を始めました。

国見町の縄文時代の遺跡は、標高50～100mの洪積台地上に分布し、32か所確認されています。早期の確実な資料はまだ認められませんが、前期（7,000年～5,500年前）には上野台遺跡（大字森山）で竪穴住居跡が確認され、中期（5,500年～4,500年前）になると規模の大きな遺跡が見られるようになります。中期の特徴的な遺構である石組複式炉[※1]を持つ住居跡は、国見町では岩淵遺跡（町指定史跡・大字高城）・山田遺跡（大字光明寺）で確認されています。岩淵遺跡では、当時の人が暮らしていた竪穴住居を復元し、縄文時代の暮らしを感じることができます。後・晩期（4,500年～2,300年前）の遺跡は、川原遺跡（大字小坂）・竹ノ内遺跡（大字西大枝）が知られ、埋甕[※3]や石囲炉[※4]が発見されています。[※2]

縄文時代の竪穴住居（岩淵遺跡・復元）　住まいとなる直径4～5mの穴を掘り、地面より低いところで生活していました。

岩淵遺跡の内部

岩淵遺跡で出土した水筒型遺物

山田遺跡で出土した縄文時代中期の土器

竹ノ内遺跡で出土した縄文時代後期の土器

※1　東北地方南部の特徴的な炉の一種。石を敷き並べた部分と土器を埋めた部分からなることから「複式」と呼ばれる。石で囲んだ部分で火を焚き、土器に火種を入れていたと推定される。

※2　縄文時代の終わりから弥生時代の初めの年代について、近年の研究では従来の年代より約500年さかのぼるという見解が出されており、特に北九州地方においてはその可能性が高いとされている。

※3　土器の中に遺体などを収容して埋設したもの。

※4　縄文時代後期の集落で作られた、石で火床を囲った炉。

約2,300年前頃には、各地に稲作技術が伝わり、水田農業が生活の中心となる弥生時代が始まります。狩猟と違い、毎年の実りが見込まれ収穫量が多く、備蓄することのできる米作りが始まったことで、それまでの生活が変化し、富の蓄積などによる社会的な階層が生まれます。時には利益を巡る衝突により、集落どうしの戦いが行われ、戦いから身を守るため高地に拠点を置く集落も現れました。

堰下遺跡で出土した蛤刃石斧

国見町には、弥生時代中期（約2,000年前頃）以降の遺跡が8か所確認されています。堰下遺跡（板橋南）では、中期に使われていたとみられる土器とともに、樹木を伐採するための磨製石斧「蛤刃石斧（はまぐりばせきふ）」が出土しました。また、稲穂を刈る石包丁が、山田遺跡（大字光明寺）で出土しており、町内の低地では水田が営まれ、木製の農具や、一部鉄製の道具が使われていたと推定されます。後期の仏供田（ぶっぐでん）遺跡（大字徳江）は低地で営まれた集落で、住居跡の中から北陸地方で作られる特徴のある小型壺の破片が出土しており、他地域との交流があったことがうかがえます。

石包丁による稲刈りの様子（秋の農作業風景）
（福島市教育委員会「ふくしま歴史絵巻」）

メモ

古　代（古墳時代・奈良時代・平安時代）

古墳群にみる有力者の出現

古墳時代になると、弥生時代に出現したエリート層の中から地域を支配するような首長が生まれ、ついには都に近い5つの地域（五畿内）の大首長を中心とした、首長連合によって国が治められるようになりました。こうして誕生したのが大和朝廷です。この時代は、首長たちのために築いたお墓（古墳）が全国各地に造られたことから、古墳時代と名づけられました。古墳には前方後円墳・円墳・方墳などがあり、畿内の前方後円墳を頂点とした序列が定められていたと考えられています。

塚野目第一号墳から出土した円筒・朝顔形埴輪

国見町にも古墳が数多く残っており、5～7世紀にかけて造られた塚野目古墳群は町内最大の古墳群です。かつては、48基あったことから四十八塚と呼ばれていましたが、現在確認することができるのは11基です。主墳の塚野目第一号墳（八幡塚古墳・県指定史跡・大字塚野目）は、5世紀後半に築かれた前方後円墳で墳長71～66mが見込まれ、古墳時代中期においては中通り地域最大の古墳となっています。錦木塚古墳（桑折町大字伊達崎）は7世紀初頭に築かれた前方後円墳で、遺体を安置する石室には国見石（凝灰岩）が使用されています。古墳の規模や優れた副葬品などによって、塚野目古墳群が、県北地域の有力な首長が代々葬られていた墓域だったことを知ることができます。このほかにも、後期の古墳群として森山古墳群や大木戸古墳群が知られ、森山古墳群では石室を見学することができます。

森山第四号墳

塚野目古墳群・反畑遺跡から出土した石製模造品

条里制と窯跡

大化の改新（645）から7世紀末にかけて律令国家を目指した体制整備が行われ、奈良時代には国見地方は陸奥国信夫郡に属し、伊達郷として把握されていました。国への納税は郡衙※1（郡役所）の仕事となり、地方の有力者が役人となり取り仕切っていました。税品目の中心は米と布で、米については班田収受法※2による徴収が実施され、班田農民には一定の法則による地割（条里制）された水田が班給されました。国見町には圃場整備※3前の昭和50年（1975）頃まで条里制の痕跡がよく残っており、発掘調査によって10世紀以前からの痕跡であったことが確かめられています。また、役所の指導で鉄製品や須恵器作りが行われたことを、山居製鉄遺跡（大字高城）や大木戸窯跡群（町指定史跡・大字大木戸）によって知ることができます。

地割りされた水田が残る山崎条里遺構（大字山崎）

徳江廃寺跡

阿武隈川に近い徳江地区に所在する徳江廃寺跡（大字徳江）は、伊達郷の人々に新しい時代の到来を認識付ける象徴として、8世紀に建立された寺院と考えられます。出土した重弁連華文軒丸瓦・旋回花文軒丸瓦・蓮華文軒丸瓦には、陸奥国府多賀城跡・信夫郡衙付属寺院の腰浜廃寺跡（福島市腰浜町）・定額寺と推定される西原廃寺跡（福島市飯坂町）※4と同様の模様が認められ、創建当初から長い間、重要な寺院として扱われていたことをうかがうことができます。

徳江廃寺跡から出土した　旋廻花文軒丸瓦

西原廃寺跡から出土した　単弁八葉蓮華文軒丸瓦
（福島市教育委員会所蔵）

※1　信夫郡衙は焼米が出土した福島市北五老内遺跡が有力と考えられている。
※2　律令国家による土地制度の根幹として、公民に一定額の田地を班ち授け、収穫した稲を徴収することを定めた法。
※3　主に農地の区画整理と道水路の整備によって、農地の集団化と利用増進を図り、農業経営の安定を目的とする。
※4　国が建てた国分寺などと同じ扱いを受ける寺院。

奥州藤原氏と阿津賀志山防塁（国指定史跡）

平安時代末期、奥州藤原氏が陸奥・出羽両国を支配するようになると、国見町もその支配下に入ったと推測されます。この時期の貴重な遺物として、洲浜双鳥鏡という12世紀後半のすぐれた工芸品が遺されています。この鏡は堰下古墳（板橋南）を利用して築かれた経塚の埋納品ではないかと考えられています。経塚は、平安時代の終わり頃に全国に波及した末法思想の下、恐怖からの救いの願いを込め、仏の教えが書かれた経典を土の中に納めた塚です。※

堰下古墳から出土した洲浜双鳥鏡

文治五年（1189）平氏を滅ぼした源頼朝は、源義経をかくまったという理由で奥州藤原氏討伐を敢行します。これに対抗するため藤原軍は、阿津賀志山から阿武隈川にかけて長さ約3.2kmの堅固な防塁を築き、迎撃の態勢を取ります。それが日本三大防塁の一つといわれる阿津賀志山防塁（国指定史跡）です。阿津賀志山の戦いは、8月8日から始まり、頼朝率いる鎌倉軍はわずか3日間で藤原軍を討ち破ります。防塁を突破した頼朝は、敗走する敵将の藤原泰衡を追って厨川（岩手県盛岡市）まで北上し、約1か月で藤原氏を滅ぼし、その後鎌倉幕府を開きます。上記合戦の戦功として伊達郡を与えられた藤原朝宗（常陸入道念西）は、常陸国より移住し在地伊達郡から伊達氏を名乗りました。以後、伊達郡は鎌倉時代から豊臣秀吉の奥州仕置で所領を失うまでの約400年間、伊達氏の支配下に置かれていました。

鎌倉軍を迎撃するために築かれた阿津賀志山防塁での合戦模型

※　釈迦が入滅（死去）後、長い年月を経ると仏教が衰えるという思想で、平安時代中頃の1052年から末法の時期に入ると考えられていた。

阿津賀志山防塁　土塁と空堀が原型をとどめている阿津賀志山防塁国道四号北側地区。

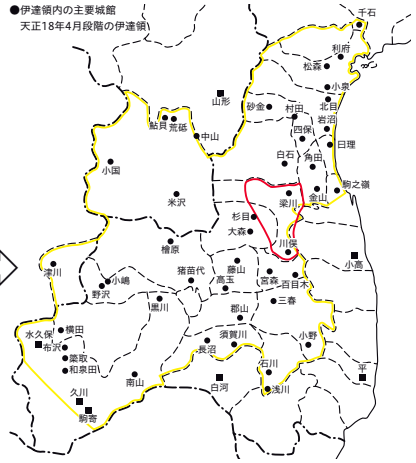
江戸時代（慶長元和年間と推定）に刊行された「新刊吾妻鏡」第９巻　文治五年8月9日・10日の条

中　世（鎌倉・南北朝・室町・戦国・安土桃山）

伊達氏の支配

東北における中世は、奥州合戦（1189）から豊臣秀吉による奥州仕置（1590）までの四世紀を指します。奥州藤原氏の滅亡後、頼朝は多くの有力御家人を地頭職に任命し、郡庄の実効支配を行わせました。奥州合戦に戦功のあった伊達朝宗（常陸入道念西）の一族も、伊達郡を与えられ常陸国から移住し、地頭として領地経営を行いました。伊達氏の居城は、桑折町・伊達市梁川町等を転々としながら支配と領地拡大に務めていくこととなります。

鎌倉時代の信夫・伊達地方



初期の伊達領
出典：『福島県史1』小林清治 作成

伊達政宗の最大版図（天正18年4月頃）
出典：『東北の中世史4』伊達氏と戦国争乱、菅野正道 作成

石母田供養石塔（国指定史跡）

石母田供養石塔

豊かな湧水があった光明寺・森山・泉田・内谷地区では、水路やため池などのかんがい施設が整備され、生産力の基盤が強化されていきました。また、光明寺地区では伊達五山の一つとして光明寺が建立されるなど、伊達氏の手厚い保護のもと寺院の整備がなされました。

また、鎌倉末期に建立された石母田供養石塔（国指定史跡）は、当時の国見町の仏教文化の特異性を示す貴重な石塔※といえます。

※徳治3年（1308）、僧智宣が親の百か日の追善供養のために建てた石製の塔婆。高さ1.8m、幅45cmの石面の上に梵字の阿閦如来、その下に6行154文字の供養文が刻まれている。書は一山一寧※1によるといわれている。一流の書家・五山文学の元祖として知られた稀に見る高僧がこの地に来ていたという事実から、石母田に高度な仏教文化があったことをうかがい知ることができる。

交通の要衝

中世末期になると、天文の乱（1542～1548）など、伊達氏内部や大名・国人・領主間の争いが続き、伊達氏は本拠地を伊達郡から米沢へと移すことになります。しかし、伊達氏本領としての伊達郡の重要性は変わりませんでした。伊達氏第16代当主輝宗と、嫡子政宗の時代には、相馬氏との抗争が絶えず、主に伊具郡がその戦場となりました。置賜（長井）※2地方に通じる小坂峠の道と、奥州全域※3と関東諸国の連絡道としての奥州街道に縦貫し、さらには伊具郡方面にも連絡する国見町域は、交通上・軍事上の重要性を増していきました。

旧羽州街道小坂峠道跡（産坂・町指定史跡）

天正17年（1589）5月、相馬氏との抗争に勝利した政宗は、磐梯山麓の摺上原の合戦で、会津黒川城の蘆名氏を大敗させ、ついに南奥（南東北・福島県と宮城・山形県の南半分）の権力を握ります。しかし天正18年（1590）、豊臣秀吉の統一権力が小田原城を陥落させ北条氏を滅ぼします。同年8月、秀吉は天下統一の総仕上げともいえる奥羽仕置を実施し、これによって東北の中世は終焉を迎えることになります。

コラム　奥羽仕置とは

天正15年（1587）、豊臣秀吉は関東・奥羽地方に向けて戦国大名間の戦争を禁止する惣無事令を発表しました。ところが小田原北条氏が違反をしたため秀吉は、全国の大名に「小田原攻め」に参戦するよう命じました。奥州の大名は、最上義光、相馬義胤、秋田実季、津軽為信、南部信直、戸沢盛安が秀吉に協力したことから領地は取り上げられませんでした。伊達政宗も参戦しましたが、遅れて参戦したことや蘆名氏を滅亡させたことから、会津周辺の領地を取り上げられました。奥羽仕置によって秀吉は、東北地方の戦国大名を処分し、自身の権力が届きやすいよう豊臣家の家臣、蒲生氏郷を会津に置くなど配置換えを行いました。翌19年秋、奥羽再仕置として政宗は前年10月に起こった大崎・葛西一揆を扇動した疑いにより、本領伊達郡、信夫郡、置賜・長井地方、刈田郡を失い、米沢城より玉造郡岩手山城（現大崎市岩出山町）へ追放されました。

※1　一山一寧は、鎌倉末期、中国から渡来した臨済宗の高僧。
※2　宮城県の南端、現在の角田市・丸森町地域。
※3　山形県の南端、現在の米沢・長井・南陽の3市と東置賜・西置賜の2郡地域。

近　世（戦国・安土桃山・江戸）

水田開墾と西根堰

江戸時代は、徳川将軍家が日本を統治していました。この時代の統治機構は、江戸幕府あるいは徳川幕府と呼ばれました。初代将軍徳川家康は、政局の混乱を収め、産業教育の振興その他の施策に力を入れました。そのため260年以上続く幕府の基盤が確立し、平和な状態が続いた時代でありました。

豊臣秀吉の奥州仕置によって伊達郡は、会津若松城の領主として入部した蒲生氏郷の所領に編入されました。さらに慶長3年（1598）1月、上杉景勝[※1]の領地へと移ります。伊達・信夫両郡は、その後も上杉氏の領地として60余年にわたり、福島城代本庄氏、梁川城代須田氏、あるいは福島郡代・奉行、福島代官によって統治されました。

上杉氏は、水田の開墾奨励や漆・紅花・養蚕等の殖産興業に力を入れました。また、農民たちの悲願でもあった西根堰・井野目堰・東根堰など用水の開削にも努力しました。なかでも西根堰は、改良を重ねて今も国見町だけでなく近隣の福島市、伊達市の農地への農業用水を供給し続けています。

西根上堰　福島市飯坂、桑折町、国見町を経て伊達市五十沢に至る全長約28㎞の農業用水路。寛永10年（1663）に完成し、当時の29か村を潤した。工期は約8年といわれ、標高差わずか50mという高い土木水準で設計された。平成22年度の土木学会選奨土木遺産に認定された。

寛文4年（1664）、藩主上杉綱勝の死去により、米沢藩は30万石から15万石に石高を削られました。福島藩を除く伊達・信夫両郡は、幕府の直轄領（天領）となり、伊奈・国領などの代官による支配を受けることになります。その後、本多家（福島藩）、松平藩（桑折藩・篠塚藩）、佐渡奉行（天領）、仙台藩預かり・木下家（足守藩）など、領主が目まぐるしく変わり幕末は幕府直轄地として明治維新を迎えます。

天明・天保の飢饉

江戸時代には、大きな飢饉が4回起こったといわれ、東北地方は特に大きな被害に苦しめられました。国見町も飢饉の影響を受け、特に大きな被害が出たのが天明の飢饉・天保の飢饉です。[※2]

天明の飢饉は、天明3年（1783）の長雨や、上野国浅間山の噴火により伊達郡まで火山灰が田畑に降り注いだため、稲の生育が妨げられ起こったとされています。[※3]農民は食糧不足で飢餓状態に陥りましたが、泉田村の黒田太郎右衛門が、日頃蓄えていた米とお金を飢えに苦しむ人々に分け与え救いました。

天保の飢饉は、天保4年（1833）、7年（1836）、8年（1837）と続けて起きました。天保8年には信夫郡・伊達郡合わせて餓死者が1万人以上にのぼり、山野の草葉や枯葉まで食べて飢えをしのぎました。

江戸時代は全国的に飢饉での餓死者が多く出ましたが、国見町が属する伊達郡内は、全国と比較すると被害が少なかったといわれています。それは、伊達郡が山に囲まれた福島盆地であることや、養蚕業が盛んで収入の道が稲作以外にもあったことなどが考えられ、飢饉時でも裕福な養蚕農家が多くいたともいわれています。

餓死地蔵尊（福島市北矢野目）
飢饉における餓死者を供養するため、天明3年（1783）9月に建立されたといわれる。
両手に丸い玉を抱えた座像が「餓死地蔵」と呼ばれ、玉は餓死者に供えたおにぎりであるとされている。

コラム　西根堰とは？

伊達郡を流れる阿武隈川を境に、右岸の梁川町・保原町は東根郷、左岸の国見町・桑折町・伊達町・梁川町の一部は西根郷と呼ばれていました。西根郷は、飯坂から宮城県境にかけての標高600～700mの長峰と呼ばれる山々からの中小河川の用水だけでは充分でなく、西根大地の末端部は常に水不足に見舞われていました。そのため、当時の米沢藩主・上杉景勝と定勝が二代に渡り農業用水路を開削しました。人の力だけが頼りの工事は、苦労の連続でした。しかし、完成した農業用水路のおかげで900万町歩もの水田を潤すこととなり、移住する農民も増加し、かつての荒れ地は一大穀倉地帯となりました。

元和4年（1618）に着工した西根下堰（約14㎞）は、荒れ地を田畑にするための開拓用水が主な役目でした。一方、寛永1年（1624）に着工した上堰は、開拓用水に加え日常生活の防火用水や、洗い場として利用されていたことが知られています。製糸工場にも使われていたほか、摺上川の上流で伐採された薪や炭にするための木材を、水が増える春や秋に堰を利用して運んだ流木と呼ばれる運搬にも利用されていました。

※1　国司や地頭が初めてその任国や領地にはいること。
※2　大雨などによる洪水・土砂崩れや、干ばつ、火山噴火、冷害などの自然災害の影響で凶作になり、人々が飢え苦しむ状況。
※3　現在の群馬県と長野県にまたがり、天明3年に噴火した成層火山。

街道と宿駅

江戸時代前期の国見町は、参勤交代の主要街道としてにぎわう奥州街道と羽州街道、年貢米など物資の運搬に盛んに利用された阿武隈川舟運、佐渡金山・生野銀山とともに日本三大鉱山として栄えた半田銀山、さらには養蚕と西根堰の開削による農業の振興もあって、大きく発展を続けました。

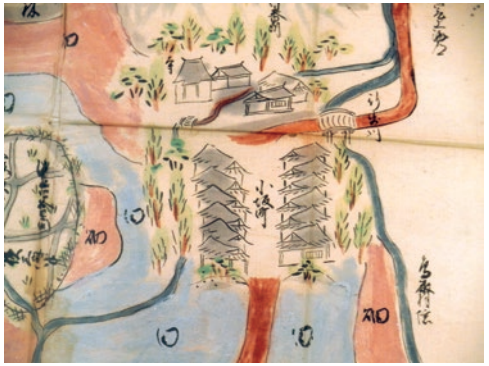
江戸日本橋から陸奥三厩（むつみんまや）（青森県）まで続く奥州街道は、桑折宿で左右に分岐し、羽州街道は国見町の小坂峠から七ヶ宿、さらに植山、秋田県の久保田、弘前の城下町と出羽国と進み油川宿（青森市）で奥州街道と合流しました。伊達・信夫両郡の街道沿いには12の宿駅が置かれ、国見町内には、奥州街道藤田宿・貝田宿、羽州街道小坂峠の登り口に小坂宿がありました。貝田宿と小坂宿は、ともに峠を隔てて仙台藩領に接する境界の宿駅であったことから、小規模な宿場であるものの口留番所が置かれていました。

西大枝深山神社廻米絵馬（町指定有形民俗文化財）
幕末期の西大枝の名主・佐藤浅次郎が、荒浜港に出役して、御城米の積替え作業の監督にあたった際の光景を、同村の画家・佐州（佐藤名平）に描かせ、深山神社（西大枝字宮ノ内）に奉納させた。

徳江河岸
幕府領となった寛文4年（1664）以降、年貢米は「御城米」と呼ばれ、江戸に廻米されることになった。徳江河岸は、幕府への年貢米（御城米）廻米のために必要な阿武隈舟運の整備に伴い設置された河岸の一つ。
※阿武隈川舟運図（福島市資料展示室蔵）

天保年間（1830～1844）藤田村絵図
奥州街道の宿場としての整備が進められ、諸大名の参勤交代や商人・旅人でにぎわいをみせた。半田銀山採掘の本格化、養蚕業の隆盛に伴い、隣接する桑折宿が郡内の中心的役割を担うと、藤田宿は周辺の農村集落の中心として物産が集散する在郷町として発達した。一と六の付く日には六斎市が立ち、農業・養蚕業の生産物を交換する場所として農村集落との関係を強めた。

元禄11年（1698）貝田村絵図
行楽や社寺参り等、長旅の宿泊地、商品荷物の継立場としてにぎわい、旅籠屋（はたごや）（角屋・吉野屋）、銭湯屋、納豆屋など、現在も宿町時代の屋号を持つ家が多く残されている。
県庁文書1983「若松城地関係其ノ他」より
※福島県歴史資料館寄託



小坂村絵図（江戸時代後期）
背後に小坂峠を持つことから、旅人の旅籠や険しい峠道を上るための牛宿などが軒を連ね、参勤交代の大名達も休息をした。
（「小坂区有文書」より）
※福島県歴史資料館寄託

近　代（明治・大正・昭和）

近代化の発展と小作農の格差

明治から昭和までの約120年間は、近代国家への急激なかじ取り、2度の世界大戦、世界の景気の急上昇と急降下などと共に、社会のシステムが大きく変わり続けた時代です。

明治20年（1887）、国見町周辺では鉄道（現JR東日本）が開通し、明治35年（1902）に藤田駅が開業しました。明治22年（1889）には、市制・町村制の施行となり、小坂村・藤田村・森江野村・大木戸村・大枝村が成立し、村議会議員が選出され村議会が誕生しました。一方で目まぐるしいまでの変化に住民は、大きな戸惑いを感じていました。近代国家への移行のさなかにあっても住民の大半を占めている農民たちは、依然として豊かな生活とはなりませんでした。地租改正が実施されても、政府は江戸時代からの年貢収入額を減らさない方針を取ったので、税負担はほとんど変わらず、各地で地租改正反対の農民一揆が起こりました。国見町でも多くの農民が小作農へ転落せざるを得ない状況に陥り、やがて伊達郡一帯に有力な地主層と多くの貧困な小作農という経済的格差の構図が生まれました。

国見町小作地率表（国見町史より）

年　代	自作地	小作地	小作地率
明治26年（1893）	7,799反	4,307反	35.60%
明治35年（1902）	8,792反	5,963反	40.40%
明治43年（1910）	9,167反	6,159反	40.10%
大正５年（1916）	8,912反	7,218反	44.70%

明治20年代の小作地率は36％に達しました。明治30年代は、開墾が進んだ時期であることを勘案すると、小作地率自体が変わらないように見えますが、実態は小作地自体が増え小作化が進んでいます。

蚕産業の発展

大正時代には、民主主義（デモクラシー）の考え方が、生活に苦しむ人々の間に広まり社会運動へと展開しました。大正3年（1914）、第一次世界大戦が起きると日本は、大戦景気に沸きます。伊達地方の養蚕業も例外ではありませんでした。

伊達郡の代表的な産業として発展した養蚕業は、「小手濫觴記」や「伊達濫觴記」によれば、奈良・平安時代に始まったと伝えられています。室町時代には伊達氏が献上したとの記録も残っています。盛んになった理由として、阿武隈川の氾濫原が桑の生育に最適な場所だったことがあげられます。吾妻連峰など山々から吹き下す冷たくて乾燥した風にさらされて育つ良質な桑が、病気に強い良質な蚕を育てます。安永元年（1772）、伊達地方は幕府から「奥州蚕種本場」の称号を与えられました。

養蚕秘録「蚕飼絹篩」
生糸や真綿を売買する人たちで大変な賑わいを見せた市の様子。伊達郡には良質な蚕種（蚕の卵）と生糸を求めて江戸や京都から大手の糸真綿商人が訪れたため、その年の全国の糸値を左右したといわれている。
（福島市教育委員会2017「ふくしま歴史絵巻」）

自然上簇　熟蚕が繭を作るために簇（繭を作るための蚕具）に自然にはい上がる。

ひきこをやとう　養蚕が盛んになると、労働者を雇った。

養蚕業を行う当時の様子

終戦と民主化へ

大戦特需がなくなると景気は落ち込みました。さらに大正9年（1920）に襲ってきた世界恐慌によって蚕糸業は、勢いを失い農村は再び不況の時代に入ります。大正末期に蚕糸業の景気回復が見られますが、昭和期に入ると再び金融恐慌に見舞われます。長く暗い昭和恐慌から立ち直ることができたのは、第二次世界大戦の危機が迫った戦時経済の時期でした。

昭和20年（1945）8月15日、日本はポツダム宣言を受諾し、太平洋戦争は日本の無条件降伏で終わりを告げました。同年9月、連合軍が福島に進駐し、武器・刀剣類の接収、国策団体の解散など、次々に発せられる指令により国見町周辺からも戦時色は一掃され、民主化政策が進められていきました。

現　代（昭和・平成）

国見町の誕生と高度経済成長

昭和20年代後半は、人々の暮らしも徐々に復興していき、とりわけ昭和29年（1954）は、国見町にとって記念すべき年になりました。前年に町村合併モデル地区として県の指定を受け、1年後藤田町、小坂村、森江野村、大木戸村、大枝村の1町4か村が、画期的な合併をなしとげ国見町が生まれたのです。戦後に行われた様々な改革の中で、もう一つ重要なのが「農地改革」です。この改革によって国見町は、地主的土地所有制から自作農を主体とする農業に変わりました。さらに人々は農業協同組合を設立し農地改革の成果を維持・発展させました。加えて次男、三男の都市部移住や兼業化を進めながら所得を増やすだけでなく、果樹や野菜の栽培にも力を注ぎました。その結果、国見町は米と養蚕の町から、米と果樹と野菜を供給する近郊農業の町へとめざましい成長を遂げたのです。

昭和29年（1954）合併前の旧町村位置図
カッコ内村名は明治9年（1876）から明治22年（1889）までの村分け

昭和40年代に入ると小坂峠道が自動車道（県道46号線）として開通し、公立藤田総合病院が新築落成しました。同50年（1975）には東北自動車道が開通し、同57年（1982）には東北新幹線（大宮～盛岡間）が開通しました。

特に国見インターチェンジの開設によって国見町は、首都圏と短時間で結ばれることとなり、現在も食糧供給基地としての役割を担っています。

東北自動車道　国見インターチェンジ

公立藤田総合病院

昭和の災害

昭和53年（1978）6月に、宮城県沖地震（震度５Ｍ７．５）が発生し、国見町は県内で最大の被害を受けました。大きな被害を受けた国見町役場庁舎は新しく建築され、翌年落成しました。また、同61年（1986）に豪雨による８．５水害が発生し、阿武隈川沿岸の徳江、川内地区は大きな被害を受けました。

宮城県沖地震で被災した国見町役場庁舎

小学校の統廃合と再活用

国見町の誕生とともに、昭和29年（1954）4月には国見町立小坂小学校、藤田小学校、森江野小学校、大木戸小学校、大枝小学校が開校しました。しかし、大枝小学校は同年7月に、東大枝地区が梁川町に編入したため、全国でも珍しい組合立の小学校である、国見町梁川町大枝中学校組合立大枝小学校となりました。

国見小学校の開校

昭和から平成に変わると少子化問題が全国的にも深刻化していきます。国見町でも徐々に児童数の減少が課題となり、また、各学校施設の老朽化問題も重なり、平成24年（2012）4月に小学校５校を統合した、国見町立国見小学校が開校しました。各地区の廃校となった校舎は、廃校活用検討委員会での検討の結果、小坂小学校校舎は、高齢者の軽運動施設として平成27年4月「小坂くらし館」に改築され、森江野小学校校舎は平成25年（2013）4月に「くにみ幼稚園」として生まれ変わりました。また、大木戸小学校は「国見町文化財センターあつかし歴史館」として、平成29年（2017）1月にオープンしました。各地区の小学校跡は、地元の思いを受け継ぎ、地域の拠り所として引き続き活用されています。

くにみ幼稚園が開園

国見町文化財センターあつかし歴史館オープン

東日本大震災からの復興とまちづくり

平成23年（2011）3月11日午後2時46分、牡鹿半島の東南東約130㎞の三陸沖（深さ約24㎞）を震源として発生した東北地方太平洋沖地震は、地震の規模を示すマグニチュードは9.0を記録し、国内では観測史上最大の地震となりました。またこの地震によって発生した津波は、所によって波高30m以上の大津波となり、東日本沿岸部の広範囲に被害を及ぼしました。（これら一連の地震被害を以下「東日本大震災」という。）

天井が落ちた国見町議場
議会は休会であり無人だった。

国見町は最大震度6強を記録し、大きな被害が出ました。全壊や半壊した家屋も多く、公共施設では、国見町役場庁舎（昭和54年〔1979〕10月竣工）が地震の揺れと周辺の液状化により使用不能となり、役場機能は観月台文化センターに移転を余儀なくされました。浜通りで津波に巻き込まれて町民1名が死亡したほか、重軽傷を負った町民は20名にのぼりました。

液状化により浮上したマンホール
至る所でこのような現象が見られた。

避難所となった観月台文化センター体育館

福島第一原子力発電所に襲来した津波は、発電所への外部からの電源供給を絶ったため、原子炉の冷却機能を奪い、結果として原子炉が破損し大量の放射性物質が外部へ放出される事故を発生させました。

町民生活においては、原発事故の放射能漏れによる学校、幼稚園、保育所などの屋外活動の不安と風評被害や、農林水産業などの生産にも大きな被害をもたらしたほか、企業や事業所などの経済活動でも深刻な影響を受けました。

町を取り巻く環境が一変し、復興・再生には地域の特性や資源を最大限に活用し、時代に合ったまちづくりに取り組むことが必要になりました。

国見町では、平成24年（2012）より「国見のみらいをつくる5つの目標」を掲げ、東日本大震災、原発事故からの復旧・復興へ向け、風評被害対策や、農業・商業や教育の振興対策、町の元気活力につながる取り組みを開始しました。

給水車による配水　大規模断水が発生し、大勢の町民が行列を作った。

復興・再生に欠かせない要素の一つが、「交流人口の拡大」です。地域に住む人を「定住人口」と言いますが、その地域に訪れる人のことを「交流人口」と言います。少子高齢化が加速し、定住人口の増加を望むことが困難になった昨今、交流人口は町の活力創出に欠かせない重要な存在です。

国見のみらいをつくる5つの目標

① 東日本大震災からの早急な復旧復興
② 安心安全な町政の実現
③ 活力ある町政の実現
④ 思いやりのある町政の実現
⑤ 国見町の継続的な維持発展

この交流人口を拡大させ、地域資源を活かした新しい国見町のまちづくりに取り組むため、町では平成25年（2013）11月に「1000年のまち。これから100年のまちづくり基本計画～里まち文化交流都市構想～」を策定しました。また、平成27年（2015）2月には、国見町の1000年培われてきた歴史や文化を受け継ぎ、これらを活かしたまちづくりを推進する「国見町歴史的風致維持向上計画」を策定し、国の認定を受けました。

平成29年5月にオープンした「道の駅国見あつかしの郷」

これらの計画により、平成29年（2017）5月に東日本大震災・原発事故からの復旧・再生のシンボルとして誕生したのが、「道の駅国見あつかしの郷」です。町の産業・観光・歴史・文化の活性化の拠点となり、また現代版の宿駅として町内外の新たな交流を生み出しています。また、町内を周遊する起点としての役割を果たし、町の歴史文化資源を巡る来町者も増加しています。

道の駅の誕生により、国見町は単なる通過点から、目的地としての町へと姿を変えつつあります。私たちは、新たな国見町の将来像をしっかりと見つめ、この地で育まれた「くにみのたからもの」を後世へ伝えていけるよう、町民と行政が協働し、さらに魅力あるまちづくりを進めていきます。

国見町の領主

区分	原始			古代					中世				近世	
時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安(前)	平安(中)	平安(後)	鎌倉	南北朝室町(前)	室町(中)	室町(後)戦国	安土桃山	江戸
泉田														
小坂														
鳥取														
内谷														
山崎														
石母田														
藤田														
森山														
徳江														
塚野目														
大木戸														
高城														
貝田														
光明寺														
西大枝														
川内														
東大枝														

小坂：川原遺跡（後期）

藤田：●堰下古墳（中期）　仏供田遺跡（後期）

森山：●森山古墳群（後期）　●塚野目古墳群（中期・後期）

大木戸：∴山崎古館遺跡　卍徳江廃寺　∴大木戸窯跡　∴山居遺跡　∴治淵遺跡（中期）　∴山田遺跡（後期）（中期）　∴滝沢遺跡

大枝：卍三常院　●王壇古墳　∴竹ノ内遺跡

（鳥取越）奥州藤原氏の影響下

（凸源宗山）（藤田）（国見駅）（経ケ岡）∴堰下古墳経塚（12世紀後半）　阿津賀志山防塁：文治5年（一二一〇）×阿津賀志山の合戦

伊達家による伊達郡入部

卍光明寺

慶長6年（一六〇一）　米沢上杉氏領（政庁：米沢城）　上杉景勝

慶長3年（一五九八）　会津上杉氏領（政庁：会津若松城）　上杉景勝

天正19年（一五九一）　会津領蒲生氏領（政庁：会津若松城）　蒲生氏郷

卍松音寺　凸小屋館　伊達成宗成隠居領

内谷氏

卍石母田　供養石塔

山崎氏　凸山崎城

石母田氏　凸石母田城

凸藤田城

（藤田氏?）貞和3年（1347）×天文の乱　藤田城攻防戦

冨塚氏

徳江氏

（塚目氏?）凸塚野目城

西大窪氏

国分氏　凸金谷館

西大枝（西大條・伊藤）氏

変遷・年表

近世			近代		現代	
江戸(前)	江戸(中)	江戸(後)	明治	大正	昭和	平成
寛文4年（一六六四）　幕府領（福島代官所支配）　代官：伊那半左衛門忠克→国領半兵衛					昭和29年（一九五四）　国見町	
延宝7年（一六七九）　福島藩領　本多忠国（政庁：福島城）						
天和2年（一六八二）　幕府領（政庁：福島代官所→岡代官所※伊達町）　代官：柘植伝兵衛						
元禄13年（一七〇〇）　桑折藩領　松平宮内少輔忠尚（政庁：桑折陣屋）						
延享4年（一七四七）　佐渡奉行付幕府領						
寛延2年（一七四九）　幕府領（政庁：桑折代官所）						
明和4年（一七六七）　幕府領（政庁：桑折代官所）						
安永4年（一七七五）　幕府領　仙台藩預り地　伊達重村（政庁：仙台城　※桑折陣屋）						
寛政元年（一七八九）　幕府領（政庁：桑折代官所）						
天保3年（一八三二）　幕府領						
慶応4年（一八九八）　明治政府直轄　民政取締：仙台藩預／奥羽越列藩同盟　×戊辰戦争（白河～会津戦争）						
明治元年（一八六八）　明治政府　白石藩領　南部彦太郎（政庁：白石城）						
明治2年（一八六九）　福島県に統合→二本松県→福島県→福島県						
明治2年（一八六九）　桑折県　民政取締：相馬中村藩						
泉田				明治22年（一八八九）　小坂村		
小坂						
鳥取						
内谷						
山崎				明治22年（一八八九）→大正4年（一九一五）　藤田村		
石母田						
藤田						
森山				明治22年（一八八九）　森江野村		
徳江						
塚野目						
西大窪村				明治4年（一八七一）　東大窪村		
大木戸村				明治9年（一八七六）　高城村		
貝田				明治22年（一八八九）　大木戸村		
光明寺						
西大枝				明治22年（一八八九）　大枝村		
川内						
東大枝					梁川町	平成17年（二〇〇五）　伊達市梁川町

幕府領　足守藩領　享和元年（一八〇一）　備中足守藩領　木下利徴（政庁：瀬上代官所）　幕府領　足守藩領　幕府領

幕府領（政庁：桑折代官所）　篠塚藩領

篠塚藩領　幕府領　延享4年（一七四七）　上野篠塚藩領　松平氏（政庁：上野篠塚陣屋）

幕府領　桑折藩領　幕領　篠塚　佐渡奉行付幕府領　上知　新領　古料　幕領

桑折藩領　上野篠塚藩領　篠塚藩領

幕府領　幕府領　篠塚藩領

桑折藩領

小学校のあゆみ

	明治	大正	昭和	平成
	6年7月 泉田泉州寺内に泉田小学校を開設 9年4月 小坂村松蔵寺内に小坂小学校を開設 22年4月 小坂尋常小学校を松蔵寺に開設 26年3月 火災により校舎を焼失 27年2月 現在地に校舎を新設し、移転 最初に設立された小学校、現在の泉田泉秀寺（奥が本堂）	13年4月 高等科を併設、小坂尋常高等小学校と改称 16年4月 小坂国民学校と改称 22年4月 小坂村立小坂小学校と改称 29年4月 町村合併により国見町立小坂小学校となる 31年8月 体育館落成、校章を制定 35年 校歌制定 48年8月 学校創立100周年記念式典挙行 56年2月 新校舎落成	24年3月 閉校
	6年12月 藤田小学校創設（大千寺を校舎として利用） 35年11月 現在地に校舎を建築 42年4月 藤田尋常高等小学校と改称 昭和22年まで使用されていた藤田小学校の校舎	16年4月 藤田国民学校と改称 22年4月 藤田町立藤田小学校と改称（中学校併設） 28年12月 創立80周年記念式典、校歌制定、校旗樹立 29年4月 町村合併により国見町立藤田小学校となる 36年7月 体育館落成 48年12月 学校創立100周年記念式典挙行 57年2月 新校舎落成	24年3月 閉校 24年3月 新体育館落成
	6年10月 伊達崎小学校支校として徳江観音寺に開設 7年7月 伊達崎小学校から独立、徳江小学校と改称 9年6月 森山村が分離、長栄寺を校舎として森山小学校設立 16年9月 塚野目村が徳江小学校区となる。観音寺校舎を廃止、民家を買収して校舎とする。 19年4月 森山、徳江両校とも藤田小学校分教室となる 23年4月 藤田小学校から独立して森江野尋常小学校となる。 25年10月 森山地区は独立して森山尋常小学校となる 42年5月 森山尋常小学校は、森江野尋常小学校に合併	11年4月 帽章（校章）を制定 8年12月 高等科を併設、森江野尋常高等小学校と改称 16年4月 森江野国民学校と改称 22年4月 森江野村立森江野小学校と改称 29年4月 町村合併により国見町立森江野小学校となる 29年12月 校歌、校旗を制定 59年11月 創立110周年記念式典挙行	4年2月 新校舎完成 5年1月 新体育館完成 24年3月 閉校
	6年9月 泉田小学校東大窪支校創設（安養寺を仮校舎として利用） 7年8月 伊達郡公立高城小学校と改称（泉田小学校から独立） 14年2月 高城字三川地内に校舎を新築移転 14年4月 貝田分校設立 20年4月 高城尋常小学校と改称 21年5月 福聚寺に光明寺分教場設立 21年7月 大木戸村霞原に校舎を新築移転、厚樫尋常小学校と改称、光明寺分教場廃止 25年10月 大木戸尋常小学校と改称	11年4月 高等科を併設、大木戸尋常高等小学校と改称 16年4月 大木戸国民学校と改称 22年4月 大木戸村立大木戸小学校と改称、高等科を廃止、大木戸村立大木戸中学校を併設 29年4月 町村合併により国見町立大木戸小学校となる 36年4月 大木戸中学校廃止（県北中に統合） 48年11月 創立100周年記念式典挙行、校歌制定 53年2月 新校舎完成	24年3月 閉校
	6年9月 徳本寺内に伊達崎三支校開設 7年6月 東大枝小学校開設 10年2月 西松寺内に西大枝小学校開設 20年4月 東大枝尋常小学校となる 25年12月 大枝尋常小学校と改称	15年4月 高等科を併設、校舎を現在地に改築移転、大枝尋常高等小学校と改称 16年4月 大枝国民学校と改称 22年4月 大枝村立大枝小学校と改称 29年4月 町村合併により国見町立大枝小学校となる 29年7月 東大枝地区が梁川町に編入、国見町梁川町大枝中学校組合立大枝小学校となる 36年3月 大枝中学校閉校に伴い、国見町梁川町大枝小学校組合立大枝小学校に校名変更 41年6月 校旗制定 48年11月 創立100周年記念式典挙行	3年2月 新校舎完成 18年1月 伊達市誕生により、伊達市国見町大枝小学校組合立大枝小学校に校名変更 24年3月 閉校

～未来へ向かって～

国見町役場庁舎（平成 27 年〔2015〕5 月開庁）

道の駅国見あつかしの郷（平成 29 年〔2017〕5 月開業）

第2章

くにみのたからもの

阿津賀志山防塁エリア

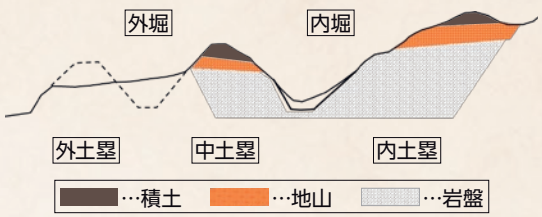
国道4号北側地区

阿津賀志山防塁（国指定史跡）は、平安時代末期の文治5年（1189年）源頼朝の奥州征伐に際し、奥州藤原氏が鎌倉軍を迎え討つため、阿津賀志山東麓に築いた防御施設であり、奥州合戦最大の戦いである阿津賀志山の戦いの舞台となりました。日本三大防塁の一つであり、昭和56年に国の史跡として指定されました。現在でもその一部が残り、「二重堀」と呼ばれ親しまれています。

敵の進攻をさえぎる長大な要塞

阿津賀志山防塁は、南に広がる平野部に押し寄せる鎌倉軍の進攻を防ぐため、阿津賀志山の中腹から阿武隈川岸（旧阿武隈川氾濫原）に至るまで、約3.2kmにわたり延々と築き上げられた長大な防御施設です。二重の空堀と三重の土塁からなる構造（二重堀構造）を基本とし、当時の主要交通路であった東山道の陸上交通と阿武隈川の河川交通の両方を遮断し要塞を構える戦術がとられています。

阿津賀志山防塁の構造



国道4号北側地区付近の断面図（イメージ）

発掘調査現場見学会

阿津賀志山防塁（下二重堀地区）

当時の軍事進行は、騎兵と歩兵部隊が主力でした。空堀を掘り土をかき上げて土塁状に積み上げることで進路を防ぎ、土塁上から敵を弓矢や槍、投石で討つことができるのです。これまでの発掘調査などにより、外土塁から内土塁までの幅は最大約40m、また堀の底から土塁の頂上までの高さは約5m以上あったのではないかと考えられています。

コラム　日本三大防塁

阿津賀志山防塁は、大宰府市の「水城」、福岡市の「元寇防塁」と並んで日本三大防塁に数えられています。福岡県太宰府市にある水城は、天智2年（663）の白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に敗れた日本が国土防衛のために築造したものです。土塁の規模は全長1.2km、基底部幅80m、高さ9m。土塁の内外には濠が設けられていました。日本書紀には、「筑紫に大堤を築いて水を貯えさせた。名づけて水城という」と記されています。元寇防塁は、白村江の戦いから約600年後に築造されました。文永11年（1274）、蒙古の襲来を受けた鎌倉幕府は、建治2年（1276）に博多湾の海岸線約20kmにわたって石造りの防塁を築き再度の来襲に備えました。これが元寇防塁です。弘安4年（1281）の弘安の役で重要な防衛拠点となりました。これらの日本三大防塁を合わせて訪ね、いにしえの人々の奮闘に思いを馳せてみてはいかがでしょう。

太宰府市 大野城市水城跡（土塁の上から）

福岡市 元寇防塁（生の松原元寇防塁）

合戦に至るまで

藤原氏の奥州支配と頼朝・義経の対立

11世紀頃、藤原清衡、基衡、秀衡が三代の間に東北を一つにまとめました。平家側は、源頼朝の本拠鎌倉の北に位置する秀衡と友好関係を結ぼうとして、秀衡を陸奥守に任命しましたが、秀衡は中立を保ちました。1185年、壇の浦の戦いで平家が滅亡すると源頼朝の勢力が一段と強くなりました。朝廷が権力を持つ貴族全盛の時代から、武家による新時代を築きたい頼朝にとって、藤原氏はじゃまな存在でした。同じ頃、壇の浦の戦いで大活躍した弟義経が、その功績を認められ朝廷から高い位を授かると、兄頼朝との仲が険悪になりました。朝廷の敵として追われる身となった義経を、秀衡がかくまったことが頼朝の藤原氏討伐の口実となりました。

源義経（源義経公東下り絵巻「平泉入り」より 中尊寺所蔵）

全国統一を図る頼朝の挙兵

文治5年（1189年）2月9日、頼朝は藤原氏攻めを決意し、全国66か国の御家人（武士）に対し動員令を下しました。

同年7月19日、鎌倉に集結した全国の御家人を頼朝は大手軍、海道軍、北陸軍の三つの軍に分け北上を開始しました。

侵攻の経路

防衛陣地構築に着手する藤原氏

藤原泰衡は、頼朝が動員令を発したことを聞き、伊達、信夫（福島市）、刈田（宮城県）三郡の他、周辺の郡からも多くの住民を動員し、防塁を築く工事を開始しました。さらに泰衡の命令で奥州全域の総力を集結し、完成までに要した労働力は述べ25万人と推定され8月8日の戦い開始直前まで工事が行われたと考えられています。

藤原泰衡
（源義経公東下り絵巻「平泉入り」より）中尊寺所蔵）

また、この阿津賀志山防塁の他、阿津賀志山の両側・背後からの侵攻を防ぐために県境の山々に砦群や石塁を構築したという伝承と遺構が残っています。

阿津賀志山防塁を築く人夫（イメージ）

阿津賀志山防塁の他の防備

コラム 防塁はなぜ阿津賀志山に築かれたか

頼朝の本陣となった藤田宿（藤田）から平泉を目指すには、阿津賀志山東麓の険しい峠を登りつめ、貝田と越河（白石市）との地峡部を通らなければなりませんでした。

一方藤原方の総大将国衡の本陣となった大木戸は、山坂を背にして、前方に鎌倉軍の動きを一望に見渡すことができました。このように攻めがたく守りやすい地形から、この地に防塁が築かれたと考えられます。

また、この地は泰衡の信頼の厚い家臣、信夫荘大鳥城主（福島市飯坂町）の佐藤元治の領地に近いことから、工事を進める上でも都合が良かったといえます。

阿津賀志山からの眺望

奥州合戦最大の激戦地となる

文治5年（1189）7月19日、鎌倉を出発した頼朝率いる大手軍は、7月29日に白河の関を越え、8月7日※国見駅（藤田）に到着し、頼朝は、東西南北を見わたせる小高い源宗山（げんそうやま）に本陣を設けました。8日午前6時頃、阿津賀志山麓では、防塁をはさんで鎌倉軍と藤原軍が激突。何千本という矢が飛び交いましたが奮闘むなしく午前10時頃、藤原軍は陣地を奪われてしまいます。9日の夜、頼朝は翌朝みずから阿津賀志山を越えて藤原軍の本陣の大木戸に攻め入ることを決めます。10日の午前6時頃、頼朝の大軍が木戸口に到着すると、戦いはすでに始まっていました。すると突然、藤原軍の本陣の背後に回った一部の鎌倉軍が「ときの声」をあげ矢を雨のように放ちました。藤原軍の陣中は、大騒動となり阿津賀志山は陥落しました。

合戦の様子（イメージ）

藤原軍と阿津賀志山防塁を望む（イメージ）

江戸時代（慶長元和年間と推定）に刊行された「新刊吾妻鏡」第9巻 文治五年7月26日・8月8日の条

※　吾妻鏡は、守備する藤原軍2万騎に対し、鎌倉大手軍の軍兵の数を記載していない。最終的に集結した28万4千騎から推測すれば数倍もの兵力ではないかと推測される。

伊達氏による支配の始まり

平泉を攻め落とし奥州征伐の終了後、源頼朝は戦功のあった御家人に恩賞（おんしょう）※を与えて鎌倉に戻りました。このうち、石那坂の戦いにおいて4人の子息とともに活躍した藤原朝宗（ふじわらのともむね）（常陸入道念西（ひたちにゅうどうねんさい））には、伊達郡の地頭職が与えられました。朝宗と息子たちは伊達郡に移り住み、伊達朝宗を名乗るようになります。これが奥州伊達氏のはじまりです。

朝宗の息子や家臣たちは、伊達郡や信夫郡に土地をもらい、村々の経営にあたり西大枝（にしおおえだし）氏、藤田（ふじた）氏、石母田（いしもだ）氏、石田（いしだ）氏、山崎（やまざきし）氏、徳江（とくえし）氏、内谷（うちやし）氏、桑折（こおりし）氏、瀬上（せのうえし）氏、飯坂（いいざかし）氏、伊達崎（だんざきし）氏（田手（たでし）氏）らは、自分たちで開いた村を名字にした伊達一族と家臣たちです。

伊達氏はこの後、戦国時代の17代伊達政宗まで、伊達郡を中心に中通りから会津地方、そして宮城県・山形県南部までの広い土地を支配する奥州一の戦国大名となり、天正18年（1590年）の豊臣秀吉による奥州仕置（おうしゅうしおき）まで支配しました。

合戦後国見に移住した伊達氏の家臣たち

（西大枝氏）
本姓は、伊藤、伊場野、原田、堀越氏などと、ともに伊達朝宗に従って下向。西大枝郷を賜わり、古舘を築いて居舘とした。伊達氏譜代の家臣。

（藤田氏）
伊達氏の「古来の一家」といわれる有力な庶流家（分家）。南北朝時代の貞和三年、吉良貞家の率いる北朝軍の総攻撃を受けて落城した。藤田城（源宗山）は、藤田氏の居城といわれる。

（石母田氏）
本姓は武田、伊達氏の譜代の家臣。居舘石母田城は、伊達氏の内紛「天文の乱」において、14代稙宗の居城となり、15代晴宗のとき石母田光頼は陸奥国の守護代（守護代理）となる。城跡は、惣構えで土塁と水堀が残されており、戦国時代の景観を偲ぶことができる。

（冨塚氏）
冨塚隆継は、伊達朝宗に従って下向。森山舘（現森山）を築いて居舘とした伊達譜代の臣。神明神社もその時の観請（神社を分けて移す）と伝えられる。後、伊達氏の宿老（家老）となる。小坂の旧口留止番所役冨塚弘家は、その子孫であり、戦国期の文書が残されている。

（山崎氏）
伊達氏譜代の臣。山崎城（JR藤田駅北側）に居住した。山崎治部少輔は、伊達政宗の庶子秀宗が伊予国（愛媛県）宇和島藩主に従って故郷を離れた。

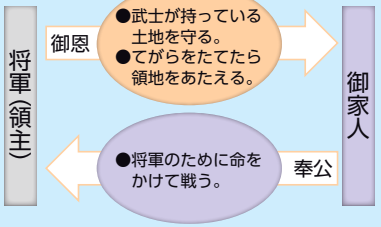
（内谷氏）
伊達氏庶流で、内谷舘（春日神社周辺）を居舘とした。南北朝期には、内谷民部大輔がみられ、南朝方であった。宗家7代行朝からはなれ、北朝方として活躍した。

（徳江氏）
伊達氏庶流。徳江舘（観音寺の前）を居舘とした。南北朝期には、伊達得（徳）江頼景が、元弘の乱の恩賞として、岩崎郡（いわき市）に所領を与えられたことが文書にある。

伊達朝宗（イメージ）

コラム　御恩と奉公

御恩とは、手柄のあった御家人（武士）に対して将軍（領主）が恩賞として土地を与えることをいいます。奉公とは、御恩に報いて将軍のために命をかけて戦うことです。鎌倉時代、源頼朝と御家人の関係からはじまったといわれています。このように土地を仲立ちとした主従関係のことを封建制度といい、江戸時代まで続きました。



※　家人や武士に対して、主君が褒美（ほうび）をさずけること。

防墨と関連文化財群を巡ってみよう

阿津賀志山山頂

標高289.2mの山頂展望台からは、北は宮城県境、東は霊山の奇岩、南の安達太良連峰の遠景、そして西の吾妻山、半田山とぐるりと山並みが飛び込んできます。眼下の福島盆地を見渡すと、東北自動車道、JR東北線、国道4号線、そして阿武隈川が南北に縦貫するすばらしい眺めを楽しむことができます。

阿津賀志山防墨（国道4号北側地区）

この地区は、土墨が削られ堀が一本埋まっていますが、全長500mに渡り、800年前の堀と土墨を見ることができる場所です。

また阿津賀志山防墨で最も眺望がよく、藤田城や福島盆地を一望することができます。

源宗山（藤田城跡）

旧奥州街道藤田宿を見下ろす藤田丘陵に立地した標高98mの山頂部は、文治5年（1189）8月阿津賀志山の戦いの時、源頼朝が本陣を設置した伝承があり、「源宗山」の由来となっています。

阿津賀志山防墨（遠矢崎地区）

北の遠矢崎丘陵の下に築かれた防墨で、背後の崖と前面の川と低湿地を利用して二重掘（堀が2本）から堀が1本に変化した地点です。

阿津賀志山防墨（高橋地区）

滑川北側の河岸段丘上に立地し、遺構北半分は空堀と土墨の保存状態良好であることから、昭和56年(1981)国指定史跡となりました。南半分は、中世の高橋舘跡により破壊されています。

阿津賀志山防墨下（二重堀地区）

阿津賀志山防墨は、阿武隈川の旧氾濫原まで築かれましたが、この下二重堀地区はその末端部に位置します。二重の空堀と三重の土墨が全長200mに渡って良好な状態で残り、その遺構を史跡内部を歩きながら見学することができます。

中尊寺蓮

中尊寺金色堂内陣の4代藤原泰衡の首桶に納められていた蓮の種が開花した「中尊寺蓮」。平成21年（2009）に株を譲り受け、地域の方々が大切に栽培しており、古戦場跡に咲く優美で清らかな花が楽しめます。

観音寺

寺の縁起に平安初期天長3年（826）8月、空海の開基とされ、源頼朝が阿津賀志山合戦のおり、三浦平六義村が観音堂に戦勝祈願したとの伝承があります。南北朝時代兵火にかかり焼失しました。堂塔を再建しましたが、阿武隈川洪水に破壊されました。後、伊達氏家臣徳江山城によって再々建されましたが、慶長5年（1600）伊達、上杉勢の合戦のあおりを受け、また焼失しました。

洪水と二度の兵火に焼失と再建を繰り返し、慶長6年（1601）現在地に、寺と観音堂を建てた経緯があり、源氏ゆかりの寺院といえる歴史を感じます。

義経の腰掛松

平安時代末、牛若丸（義経）が京の鞍馬山から平泉に下向する際、腰を掛けたとの伝説が残り、およそ高さ4m東西34.5m南北33mの枝は龍の姿に見える見事な松でした。江戸時代に多くの旅人や文人が訪れた初代松は、文政4年（1821）に焼失したため、現在幹を覆屋で保存しており、その傍らに二代目松から接木した三代目松を育成しています。

弁慶の硯石

治承4年（1180）源頼朝が伊豆で旗揚げをした時、義経が平泉から兄のもとへ向かう途中、硯石山で休憩をし集結した軍勢の名前を記すため、弁慶が山頂の国見石で墨をすったという伝承があり、町内に残る義経主従の伝説の一つとして知られています。

コラム　保護・顕彰活動

国見小学校のふるさと学習

江戸時代の国見町は、上杉氏・松平氏・天領と支配体制が変遷しますが、奥州藤原氏や源義経とのゆかりを強く感じる人々によって史跡・伝承地も含めた保護・顕彰活動がされてきました。阿津賀志山防塁は、830年以上の経過の中、一部耕作化された部分もありますが全長約3.2kmのほぼ半分近くが残っており、長い間地域の人々が大切に守ってきました。現在も小中学校でのふるさと学習「国見学」として阿津賀志山防塁を学んでいます。

平成元年（1989）には「あつかし山奥州合戦800年祭」を実施し、記念事業として「義経まつり武者行列」を行いました。その後、平成8年～10年の3年間、商工振興活性化事業として実施していらい、町のイベントとして定着しました。特にメインとなる武者行列には、相馬野馬追で活躍する中之郷騎馬会の協力を得て勇壮、華やかに開催してきました。しかし、第16回（平成23年）～第17回（平成24年）は、東日本大震災の影響により内容を変更しての開催となりました。

第18回（平成25年）から復活した武者行列は、町民の心の元気を取り戻すための義経公行列として生まれ変わりました。平和と鎮魂を祈った平泉文化圏の南域にあたる国見町では、郷土の歴史を町民共有の誇りとして深め、広く伝えていきたいと考えています。

義経まつり

メモ

旧奥州街道エリア

奥州街道は、江戸時代の五街道※の一つで、「奥州道中」とも呼ばれました。幕府道中奉行の管轄では白河宿までを指し、以北は奥羽・出羽・松前諸大名の参勤交代の主要街道として各藩が整備し、江戸から陸奥三厩（青森県）まで続いていました。

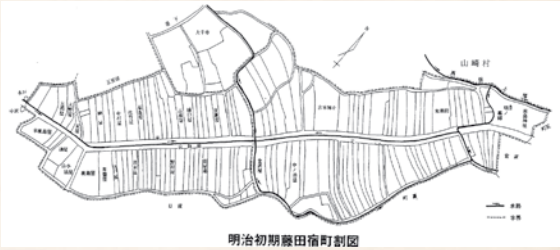
国見町には、奥州街道沿いに、貝田宿・藤田宿の宿場町が整備され、交通の要衝として栄えました。町内に残る歴史的建物や町並みがかつての宿場町の様相を今に伝えています。

※　江戸時代に江戸・日本橋を起点に伸びる街道。東海道、中山道、日光街道、甲州街道、そして奥州街道。1601年（慶長6年）に徳川家康が全国を支配するため江戸と各地を結んだ。

旧奥州街道藤田宿

藤田宿の町並み

軍事拠点から宿駅、物流の中心として発展



藤田宿町割図

旧奥州街道藤田宿は、短冊状の町割りに明治期から昭和期に建築された町屋や洋館、石蔵が現存し、古くから伝わる祭礼や市が今も盛んに行われています。宿場の成立時期は定かではありませんが、鎌倉幕府の歴史書「吾妻鏡」には、源頼朝が阿津賀志山の合戦に藤田宿を本営としたと記されています。江戸時代に入ると奥州街道56番目の宿駅として諸大名の参勤交代や多くの商人、旅人が行き交い、また羽州街道小坂宿から阿武隈川に抜ける東西ルートの物流路と奥州街道とが交差する要衝の地であったことから、たくさんの旅籠※1・商家でにぎわいました。半田銀山の採掘や養蚕業で伊達郡内が隆盛していくと、藤田宿は「六斎市」という定期市が開催され、地域経済の中心として発展していきました。明治20年（1887）、東北本線が東京一塩釜駅間に開通すると宿駅としての機能は大きく低下しますが、明治35年（1902）に藤田駅が開業し、再び物流の拠点となり、養蚕・製糸業を支え、また在郷町※2として町内の中心として繁栄しました。

※1　宿屋、旅館
※2　農村部などで商品生産の発展に伴って発生した町

旧奥州街道藤田宿の見どころ

奥山家住宅主屋・洋館（国登録有形文化財）

奥山家は江戸時代末の天保年間（1830～1844）から昭和初期にかけて呉服商・地主・金融業などで大成し、福島県会議員や藤田町長（現在の国見町藤田）などを務めるなど名望家としても活躍した一族でした。

奥山家住宅（内部非公開 ※要問合せ）

この奥山家住宅は、隆盛を極めた3代目忠左衛門が大正10年（1921）に迎賓館として建築したものです。忠左衛門は、政治家・事業家として旧藤田町の振興と発展、近代化に大きな役割を果たし、藤田駅や第百七銀行藤田支店の誘致にも尽力しました。

建物はルネサンス様式をベースとした洋館と純和風の主屋から成っています。洋館は木骨石造で、白いレンガ貼りの外壁の内側には国見石が積まれており、滑らかな曲線や歴史的モチーフを用いたレリーフが特徴です。また、上げ下げ窓の外側には防火シャッターが備えられ、当時の最新技術が施されています。主屋は、欄間や板戸に松竹梅、鶴亀、七福神、龍などの彫刻が施され慶賀な空間が造られており、かつては婚礼の場にもなりました。

洋館

天井には地中海の植物アカンサスのレリーフ

主屋　上段ノ間

主屋　玄関天井の彫刻

源宗山（藤田城跡）

源宗山は旧藤田宿の後背に位置する標高95mの独立丘陵で、文治5年（1189）阿津賀志山の戦いの折、源頼朝が鎌倉軍の本陣を置いたと伝わります。

藤田城平面図

南北朝時代には南朝方の伊達氏7代行朝配下の「藤田城」として、霊山城とともに南北朝争乱期の舞台となり貞和3年（1347）7月22日に落城します。室町時代には伊達氏の筆頭家臣、藤田氏の居城であったと考えられ、戦国時代の天文年間に起こった天文の乱（1542～1548）において藤田氏は断絶し，この後廃城になったと考えられています。

現在、西辺と南辺の一部に土塁跡、北西隅に枡形虎口※の遺構を残しており、これらはその形態、構造から、戦国時期のものと推測されます。

鹿島神社

「鹿島神社記」に源頼朝の戦勝祈願の伝説が残る鹿島神社。同縁起によると、社殿は8世紀頃に藤田字古鹿島の地（現在の社殿から300mほど北）に創建されたと伝わります。その後、焼失（永禄年間1558～1570）・再建（慶長年間1596～1615）を経て、享保10年（1725）に現在の地に遷座し、医薬神社（江戸時代には「明けの薬師」）とともに祀られました。

五穀豊穣や戦勝祈願に加え、江戸時代は旧藤田宿の発展に伴い、六斎市での商売繁盛、また武士や文人の旅に加え庶民の旅が盛んになると、旅の安全祈願する神社でもあったといわれています。

毎年10月に行われる例大祭は、神輿渡御や山車が勇ましいかけ声とともに激しくぶつかる「もみ合い」を特徴とする勇壮な祭です。

鹿島神社

「（源頼朝は）軍神鹿島明神に祈願し、爾来この地に藤田兵庫またの名大学を地頭として封じ伊達家に配属せしめ、この宿の経営と神社の信仰に誠意を尽くし神社修営に努めました。そのため里人その徳を慕い、この宿場を藤田と呼称するようになりました。」（「鹿島神社記」より）

※　城の門（入口）からの経路が直角に折れており、侵入者は守備側からの攻撃を全面に浴びることになる。

旧佐藤家住宅（県指定重要文化財）

旧佐藤家住宅

江戸時代中期（1700年代）に建てられた旧佐藤家住宅（県重要文化財）は、当時の福島・伊達地方の本百姓（中級農民）の典型的な住宅です。昭和47年（1972）、現在の国見IC付近（小坂字木八丁地内）から移転復元されました。木造平屋造りで屋根は寄棟茅葺です。農作業などにも使われる広い土間、三方大壁の手法や出入口の大戸など、古い建築様式が残されています。内部は、入口から土間、中間、座敷、納戸が並ぶ三間取というシンプルな間取りになっています。中間（勝手）に切られた囲炉裏は、自在鉤で炊事をし、食事もする一家団らんの場でもありました。曲がった木を巧みに利用した梁や生活で使用していた民具など、当時の人々の知恵や暮らしを見ることができます。

コラム　定期市（六斎市）の名残を留める農業市

天保年間（1831～1845）の絵図にも描かれている観月台ため池は、農業用水を確保するための重要な施設です。明治期以降になると周辺に旅館やカフェが建てられ、大正期には桜や松が植えられ観月台公園と呼ばれ住民の憩いの場となりました。毎年5月5日に園内で開催されている農業市の起源は明らかではありませんが、江戸時代に現在の福島市宮代の山王社で行われていた農業市が各地に広がったという伝承があります。ため池周辺約400mに植木や盆栽、果物、苗物などを販売する店舗が並ぶ農業市は、県北地方では規模の大きな市として受け継がれてきました。今でも農業用具や日用品を販売する店舗も多く、六斎市（定期市）の名残を見ることができます。

農業市

旧奥州街道貝田宿

交通の要衝、半農半商の宿場から農村集落へ転換

貝田宿の町並み

旧奥州街道貝田宿が位置する貝田地区は、江戸時代より、南北に通る奥州街道に加え、伊達市梁川町に向かって東へ伸びる梁川道の起点となり、奥羽山脈を越える山道と合わせて交通の要衝でした。国見峠などの険しい道のりが続くも宿場が未整備であったこの地に、伊達氏17代政宗が天正年間（1573～1591）頃に宿町として整備したのが始まりとされます。江戸時代初期頃の参勤交代のための街道整備の一つとして、藤田宿、越河宿間の合いの宿として貝田宿が設置されました。

幕末まで仙台藩領との境界の宿場として機能し、諸大名の参勤交代に伴う利便性向上や伝馬制度※1の充実が図られ、本陣・脇本陣※2・旅籠・問屋場※3・検断※4などが設置されました。

また、江戸時代後期には福島盆地一円で隆盛した養蚕業が貝田宿でも盛んとなり農耕兼務の宿場として推移してきました。明治20年（1887）に鉄道（現在のJR東北本線）が開通すると宿場としての役割は終わりを迎えます。明治期から大正期に沿線の大火が続発したことにより、町並みと人々の暮らしは大きく変わり、農村集落へと変化していきました。

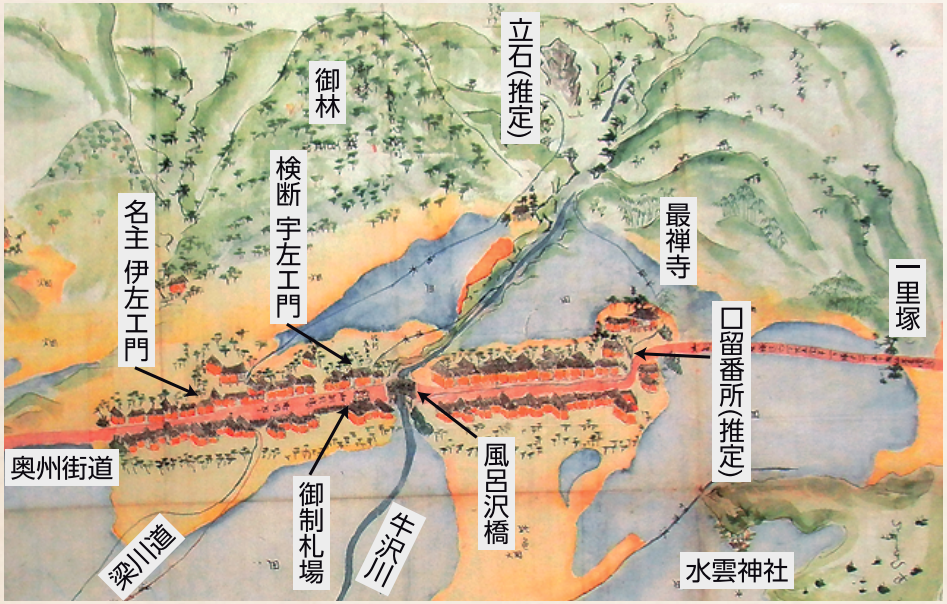
しかし当時の宿場の様子は、かつての屋号や町割り、水路などの水利用にその名残を見ることができ、養蚕に使用された家並が併存する景観が今も残っています。

※1　街道の要所「宿駅」に常備されている人と馬で宿駅から宿駅まで公用の書類や荷物を輸送する制度。律令時代から採用されてきた制度を徳川家康が整備。
※2　本陣は大名などの宿泊施設。脇本陣は、本陣だけでは足りなかったり、藩同士が鉢合わせになった時に格式の低いほうの藩が利用した宿。
※3　宿場ごとに人と馬を替えて人や荷物を引き継いで送ったり、参勤交代や大名行列の際に周辺から人や馬を手配するなど事務作業を行う場所。
※4　近世において名主の上の村役人として訴訟、裁判などの事務をあつかった。

貝田宿の様子

元禄11年（1698）の「貝田村絵地図」によれば、貝田宿は牛沢川を挟み町内四丁（440m）あり、宿場の中央に「御制札場※1」（高札場）、牛沢川には風呂沢橋（現在の貝田橋）と呼ばれる土橋がかけられていました。街道がクランク状に折れ曲がった町尻には関所の役割を担った口留番所があり、背後の山並みには湧き水と牛沢川上流から取水し町場に引き込んでいた3本の用水路がありました。また「御林」（現在の山形山）の文字から当時幕府が桑折代官所を通じ直轄で涵養※2林を管理していたこともわかります。さらに今も祭礼が受け継がれている水雲神社や一里塚も記されています。

旅人が行き来した貝田宿の様子
『金草鞋』（1813～1834年）



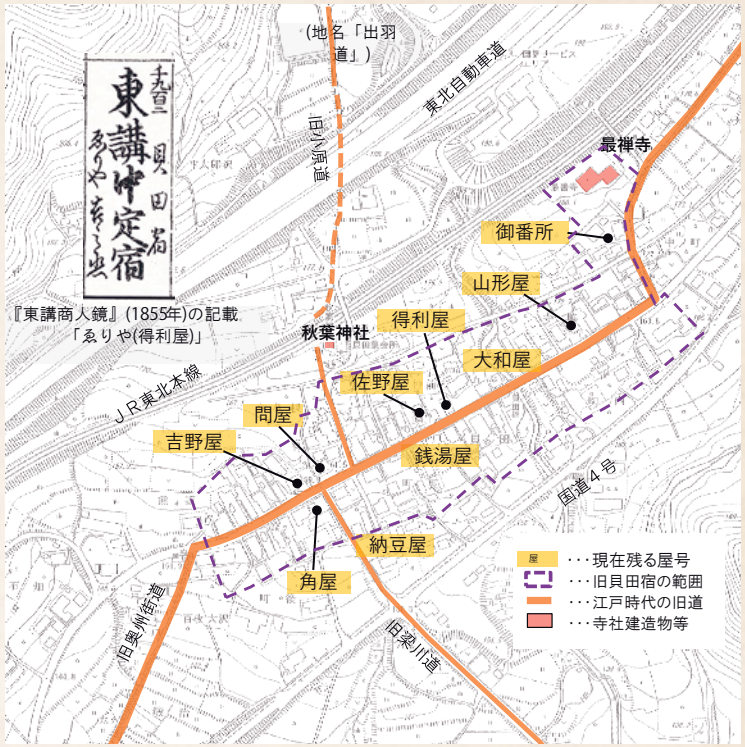
元禄11年（1698）『貝田村絵図』（県庁文書1983『若松城地関係其ノ他』より）※福島県歴史資料館寄託

※1　宿場に関する様々な決まり事が揚げられる所。
※2　山地に水を蓄え、河川の流量を調節して渇水しないようにする目的で設けられた森林。

旧貝田宿の名残

今も残る当時の屋号

旧貝田宿は、旧問屋・本陣・脇本陣・旅籠（はたご）などの旧家において、現在も当時の屋号で呼ばれているのが特徴です。「佐野屋」は宿場の中央に位置し、現在の主屋は大正15年（1926）に建築された養蚕住宅ですが、江戸時代には旅籠を営んでいました。「得利（えり）屋」は、安政2年（1855）の「東講商人鏡（あづまこうしょうにんかがみ）」に優良旅籠の1つとして記載があり、「佐野屋」が本陣、「得利屋」が脇本陣であったと伝わります。



現在に伝わる貝田宿の屋号と街道・宿場の範囲

佐藤家（佐野屋）住宅主屋

※個人宅のため内部見学は不可。

「佐野屋」は、総二階建てで養蚕に適した造りとなっており、広く、光の入る構造となった屋根裏や床下の火鉢、屋根の棟には気抜きなど蚕の温室飼育のための装置が備えられています。現在では養蚕は行われていませんが、趣ある建物は養蚕業の歴史や時代の変遷を今に伝えています。

近代の鉄道遺構

明治20年（1887）黒磯ー塩釜間の鉄道開業により、貝田の町並みには家々の西側に隣接して線路が敷かれ、蒸気機関車が往来することとなり、西風が吹くと火の粉による大火が幾度も発生し、江戸時代の旅籠や問屋などの家屋はことごとく焼失してしまいました。貝田地区の住民は線路の移転を嘆願し、大正9年（1920）に現在のJR東北本線の線路へ移設されました。

牛沢川（貝田付近の上流部では「姥神沢（うばがみさわ）」と呼ばれる）に架かる貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋（町指定有形文化財）は、鉄道開業時に建設された鉄道橋で、線路が移設されるまで使用されていました。橋の構造はレンガ積のアーチ構造で、町道として舗装された上部以外は当時のまま残されており、明治の貴重な鉄道遺産として今に伝えています。

貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋

観音寺観音堂汽車絵馬

明治25年（1892）に徳江タケ（徳江字団扇）が刺繍を施した絵馬が観音寺観音堂に奉納されている。

コラム　国見町の撮り鉄スポット！桃とスモモと電車と菜の花

果樹園が広がる4月下旬の貝田駅周辺は、フォトジェニックスポット。特におすすめしたいのが秋葉神社の裏です。桃とスモモが咲き誇る果樹畑が続く斜面に群れ咲く黄色い菜の花。晴れた日には、桃源郷を走る東北本線を撮ることができますよ。一年に一度の絶景をお見逃しなく。

貝田口留番所跡（かいだくちどめばんしょあと）

旧奥州街道貝田宿は、奥羽最大の仙台伊達藩との境に位置し、軍事・交通の要衝の地であったことから、寛永15年に上杉藩により口留番所が設置されました。口留番所とは、物資が他の藩へ流出することを防いだり、旅人の取り締まりなどを行う関所のことです。

貝田口留番所跡

上杉氏が支配する時期には、家中の侍が番士の任務についていたとみられます。寛文4年（1664）上杉藩の半地削封（領地が半分減らされた）により、伊達・信夫の両郡は幕府領となり、貝田口留番所も引き継がれ、幕領代官の統治のもと、村役人の手付（てつけ）（農政を担当する地方役人）が務めることとなります。現在でも貝田で「御番所（ごばんしょ）」と呼ばれる岡田家に伝わる「先祖書」によれば、幕府領となった寛文年間から幕末の番所廃止時まで番所役を世襲で務めたと伝わっています。

秋葉神社（あきばじんじゃ）と水雲神社（すいうんじんじゃ）

秋葉神社と水雲神社は、貝田の鎮守社として祀られています。旧宿場町の中にある秋葉神社は、文政10年（1827）に現在の場所に遷座され、火伏の神として広く信仰されています。毎年、地区の人々により春の祭礼が行われ、大火が続いた貝田の「鎮火守護」として家内安全と五穀豊穣が祈願されています。

秋葉神社

水雲神社は創建年代は不明ですが、元禄11年（1698）の「貝田村絵図」には描かれており、旧貝田宿から北に外れた貝田字宮の腰に所在します。明治期より旧貝田村の村社として、秋の祭礼では家内安全・息災、子孫繁栄、五穀豊穣を祈り、神事終了後地区の人々が集まって「直会（なおらい）」が行われます。

両社の祭礼は、貝田地区の神社会と町内会に加え、地区内の10軒が年毎に輪番で担当する「宿（やど）」の家主が中心となり、準備や運営を行っています。地区を離れた住民も子どもと一緒に参加し、親戚や地域と交流しながら、地元貝田の生活習慣や祭礼風景が受け継がれる場となっています。

旧奥州道中国見峠長坂跡（町指定史跡）

旧奥州道中国見峠長坂跡

旧奥州街道の難所といわれた国見峠。その一部である長坂跡は、近世街道後の姿を良好に残しています。深緑の中に堀割状の道跡が約400m続き、路面には石が露出していることから、石積み・敷石であったとも考えられます。坂道を登った先の平場には茶屋が2件あったと伝わり、多くの人々が休憩した所でした。

元禄2年（1689）5月3日松尾芭蕉は弟子の曽良とともに奥州街道を北上して、国見峠に差しかかった様子が紀行文『おくのほそ道』の中に、芭蕉は「路縦横に踏で伊達の大木戸を越す」と峠越えの様子を伝え、また『曽良随行日記』では「国見峠」の地名が登場します。

一帯は、文治5年（1189）の奥州合戦で激戦が繰り広げられた古戦場でもあり、この先の経ヶ岡は、阿津賀志山合戦と同時に行われた、石那坂の戦い（福島市）で敗北した佐藤一族（奥州藤原氏家臣）の首級がさらされた場所でもあります。

多くの大名や旅人が行き来した当時の面影を今に伝えています。

芭蕉記念碑

江戸時代の国見峠（奥州道中絵図）
（「木目沢家文書」より）※福島県歴史資料館寄託

メモ

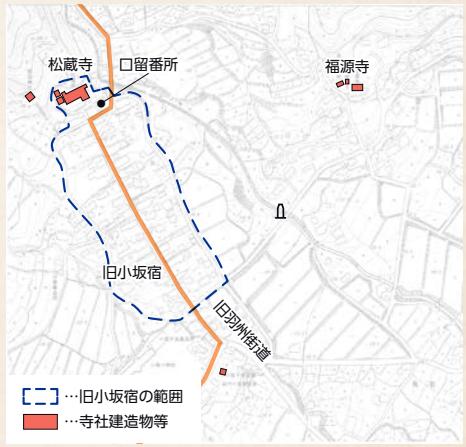
旧羽州街道エリア

奥州街道と並ぶ東北の二大幹線街道の一つが羽州街道です。奥州街道桑折宿で左に分岐し、国見町の小坂峠から宮城県の七ヶ宿、さらに山形県の上山（かみのやま）、秋田県の久保田、弘前の城下町と出羽国（でわのくに）を縦断し、油川宿（あぶらがわ）（青森市）で奥州街道に合流しました。当時、参勤交代で利用した藩は13藩もありました。

旧羽州街道小坂宿

小坂宿の街並み

羽州街道の最初の宿場町が小坂宿です。背後に難所となる峠道が控えていたことから参勤交代の大名も旅人も小坂宿で宿泊や休息をしたといわれています。貝田宿同様、街道を挟んで短冊状に屋敷割りが続く集落で、宿駅の長さは約三丁（約330m）ありました。また、仙台藩との境界だったこともあり軍事的にも重要視され、ここにも口留番所が設けられていました。北に高く南に低い地形から屋敷地は階段状に配置され、明治以降、大規模な工事開発が行われなかったことから、現在も往時の面影を感じることができます。



旧小坂宿範囲図

旧羽州街道小坂峠道跡（町指定史跡）

旧羽州街道小坂峠道

小坂峠道跡は、国見町と宮城県白石市との境にあり、江戸時代に出羽国諸大名の参勤交代や御城米[※1]の輸送などに利用された街道跡です。峠は、標高441mあり街道有数の難所で、急な坂道を登る時の苦労がお産の苦しみのようだということから別名「産坂」とも呼ばれました。峠からは伊達地方が一望できるほか、宮城県側には赤い鳥居が並ぶ万蔵稲荷、その先にも往時の宿場町の面影を残す集落があります。天正7年（1579）、三春から伊達政宗に輿入れした愛姫もこの峠を越えて米沢に向かいました。旧道の東側には、慶応2年（1866）に開削した新道（慶応新道）があります。

伊達成宗墓

伊達成宗墓

国見町小坂地区には、伊達成宗（12代当主）の墓があります。成宗は、足利将軍家との関係強化に成功し、伊達氏の力を天下に知らしめた人物でした。文明15年（1483）の上洛[※2]では、朝廷や室町幕府の要人・寺社などに対して太刀や馬・砂金などを献上したとの記録が残ります。

晩年、成宗は梁川城（伊達市）から小坂の「小屋館[※3]」と呼ばれる城館に隠居します。しかし、息子の尚宗（13代当主）との対立から「明応の乱」（1494～1496年）が勃発。小屋館も重要な拠点となりますが、山形県長井などの戦いで成宗は敗戦します。

内乱後も、成宗はこの地で余生を過ごしました。没後は梁川を見渡せる場所に墓所が築かれ、伊達氏が建立した「五峰山松音寺[※4]」が菩提寺として定められたと伝わります。

※1　江戸幕府直轄地（天領）からの年貢米。
※2　天皇家や将軍家のある京都に入ること。
※3　小屋館は、標高261.5mの袖ケ浦山に位置した山城で、長享元年（1487）から成宗が死去する明応9年（1500）（異説ある）まで存在していたとされています。
※4　五峰山松音寺はのちに伊具郡丸森町を経て、現在は仙台市若林区に移されています。

福源寺地蔵庵観音堂（町指定有形文化財）

福源寺地蔵庵観音堂

福源寺地蔵庵観音堂は、応永年間（室町時代、1394～1427）に建立され、「鳥取観音」として信仰を集めるようになりました。

現在の観音堂は明治8年（1875）に再建され、内部の天井には明治9年（1876）に描かれた花や鳳凰の絵が描かれ、透かし彫りなどの装飾が施されています。

福島盆地には、信達三十三観音・伊達秩父三十四観音など複数の観音霊場巡りを行う霊場があり、観音信仰は江戸時代後期以降の養蚕業の勃興とともに、観音信仰と豊蚕への人々の願いが結び付き、発展してきました。福源寺地蔵庵観音堂も17世紀以降、信達三十三観音霊場の21番札所となり、本尊である馬頭観世音像は、豊蚕の恵みをもたらすといわれ、多くの巡礼者が訪れました。

鳥取集落には、この馬頭観世音像を守る観音講が古くから組織され、現在も「観音様を守る会」として存続しており、毎月の御詠歌や清掃などの活動のほか、巡礼者（団体）に対して御朱印の押印とともに、隣接する公民館（お茶場）にて野菜や山菜などを用いたおもてなしを行っています。

鳳凰や花が描かれた天井絵

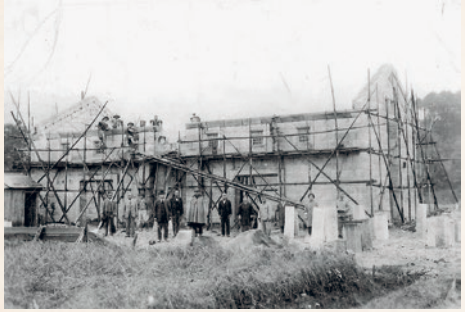
観音講の活動

旧小坂村産業組合石蔵（国登録有形文化財）

国見町では、江戸時代末期頃から昭和40年代後半まで凝灰岩の「国見石」が採掘されていました。旧小坂村産業組合石蔵は、この国見石を使い昭和16年（1941）に建築された町内で現存する最大級の石蔵です。

旧小坂村産業組合石蔵

この石蔵の建築にあたっては、大規模な石造建築を可能とする木骨石造やバットレスという新たな建築技法が用いられ、内部の巧みな小屋組などから当時の技術の高さがうかがえます。


石蔵施行当時

施工には、国見町の石蔵建築の先駆けである伊藤柳太郎ほか多数の石工が携わり、その技術は他の石工に広く伝えられました。また、国見石の石蔵は土蔵に比べ短期間で安価に建設が可能で、耐火性や気密性に優れ内部の温度・湿度が一定に保たれるため、穀物の保存に最適な空間となり、町内外に非常に多く建築されました。町内には現在でも500棟を超える石蔵があり、その中でも当該石蔵は、構造や規模において希少で、町特有の景観を示す重要な建造物となっています。

木材の柱と梁で支える木骨石造

深山神社の大榧大藤（町指定天然記念物）

藤田から旧羽州街道小坂宿に向かう県道沿いに、旧鳥取村の鎮守深山神社があります。境内には、町指定の天然記念物の大榧大藤があり、樹齢500年以上ともいわれる大榧を、4本の木からなる大藤（樹齢推定300年以上）が覆うように巻き付き、藤蔓から無数に下垂した花が咲き乱れる姿は大変見事で、その気品に満ちた花と香りは毎年多くの人々を魅了しています。

深山神社の大榧大藤

半田銀山二階平坑口跡（町指定史跡）

国見町に隣接する桑折町の半田山には、日本有数の産出量を誇った半田銀山※が存在しました。半田銀山は、伊達氏や上杉氏により江戸時代初めに開発され、宝歴6年（1756）以後は幕府の直営（主に桑折代官が経営）となり、日本三大鉱山の一つとして幕府財政を支える重要な鉱山でした。

半田銀山二階平坑口跡

銀山には、地元だけでなく山形や新潟などからの鉱夫、生野・石見・佐渡からの技術者が集まり、鉱山を支える産業（材木・鍛冶・醸造など）も栄え、代官所が置かれた桑折宿だけでなく、藤田宿でも多くの人や物・文化が集まりにぎわいました。

明治時代に入ると薩摩藩出身の五代友厚により再興され、昭和25年（1950）まで操業されていました。採掘のために作られた長大な坑道は国見町まで伸び、現在も坑口が残されています。

※　佐渡金山（新潟県）・生野銀山（兵庫県）とともに「日本三大鉱山」の一つとされています。

光明寺エリア

豊かな湧水に恵まれた光明寺集落では、水路により御瀧神社（神池）・三常院・福聚寺などの寺社と各家の水場が結ばれ、人々はその恵みを享受してきました。
湧水や地域に巡らされた水路を共同で維持管理し、信仰の対象にする活動は、人々の営みを支え、生活のよりどころとなり、さらには中世の光明寺跡を今に伝えることにもつながっています。

御瀧神社湧水（町指定天然記念物）と光明寺集落の水利用

光明寺集落に所在する「御瀧神社の湧水」（町指定天然記念物）は、透明度の高い水質と豊富な水量により清浄な空間をつくりだしています。豊かな恵みを生み出す源として人々の信仰の対象とされ、はるか昔から存在していました。

御瀧神社の湧水

一帯の谷地は、平安時代の寺院である三常院（976年創建）、鎌倉時代初頭の伊達朝宗夫人墓などにみられるように、古代以降聖域として存在してきました。そして、伊達氏第4代の伊達政依により「伊達五山」の一つとして「光明寺」が整備され、康元元年（1256）頃には、集落名も「湯沢※」から「光明寺」に変えられたと伝わります。

以後、慶長9年（1604）に伊達氏が仙台へ領地替えを行ったことに伴う光明寺の移転まで、伊達氏の庇護のもと、寺社町・門前町として発展しました。江戸時代以降は、養蚕業を中心とする農村集落の色を濃くし、貝田から梁川に抜ける脇街道沿いの集落として人と物が往来しました。

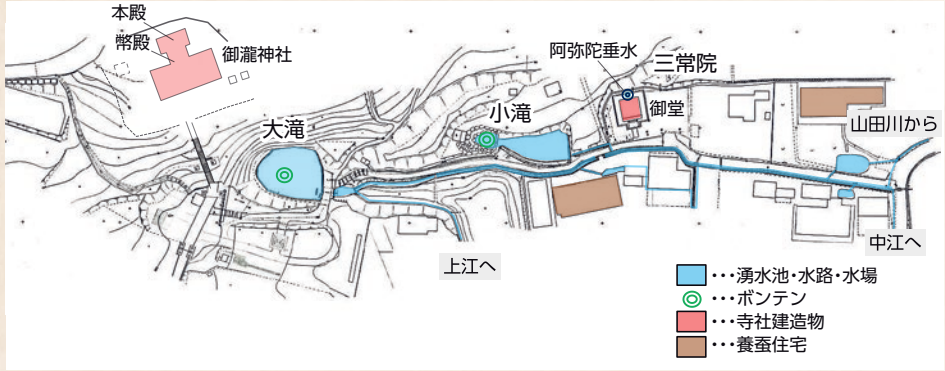
光明寺集落の町並みと水利用の様子

御瀧神社湧水は「大滝」と「小滝」の2か所の神池からなり、3本の水路に分かれて流れていきます。江戸時代には概ねかんがい施設が整えられ、各家の水場で使用された後、周辺の水田約21haに供給されています。

※　仏教を深く信仰した伊達政依が鎌倉時代に伊達郡に創建した5つの臨済宗の寺（満勝寺、光明寺、観音寺、光福寺、東昌寺）のこと。

大滝

小滝



各家では、農耕具や野菜等を洗う場所として使用され、かつては生活で用いる水全般を水場から確保していました。

この湧水池と水路は集落の住民により日常的に大切に維持管理されています。また御瀧神社では、毎年4月の祭礼の1週間前に神池の水を抜き、周辺の水路とともに掃除をして清めた後、神池の中央にボンテン（先に幣束がつけられた青竹）を立てる「滝普請」を行います。

日常的な水の利用と管理、湧水を祀る祭礼の活動は、五穀豊穣への祈りと豊かな自然に対する感謝が込められています。

水場の利用

滝普請

御瀧神社

御瀧神社の縁起は不明ですが、江戸時代には「稲荷大明神」と呼ばれ、集落の根源である水を祀り、五穀豊穣を願う神社として、光明寺集落でも古くから存在していました。

大滝を見下ろす丘の上にある社殿は、昭和33年（1958）に本殿・幣殿・拝殿が再建されました。本殿は国見石の石造建築物の技術を反映した石造りとなっており、明治期に整備された参道には赤瀧石（伊達市梁川町産出の赤褐色凝灰石）が用いられています。

拝殿内には、養蚕に関わる絵馬が多数奉納され、豊蚕の祈りを伝えています。かつて参道では養蚕道具や農産物などの市が立ち、盆踊りや集落の催しなども境内で行うなど、集落のにぎわいの中心でした。

現在は、参道脇に公園が整備され、春はソメイヨシノが咲き誇り、人々が集う場所となっています。

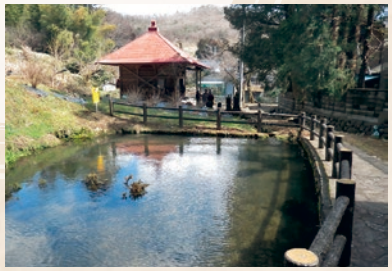
御瀧神社社殿

赤瀧石を用いた参道

養蚕図絵馬

鼠除白蛇図絵馬

三常院


小滝と三常院御堂

三常院は、貞観元年（859）に僧堯養によって高寺山（現在の御堂の背後の山）に創建され、元慶年間（877～885）に焼失し、現在の場所に移されたといわれています。小滝の隣に建つ御堂は、文政2年（1737）に再建され、慈覚大師の作といわれる阿弥陀如来と観音菩薩、勢至菩薩の三尊像を安置しています。

三常院の巡礼札

また、御堂本尊の下から湧き出る水を「阿弥陀垂水」とよび、眼病や皮膚病に効果があると伝えられる水場があります。江戸時代には、住職が大滝と小滝の管理を行っていたほか、伊達秩父三十三観音の第16番札所として人々の信仰を集めていました。

現在は、地域の人々が維持管理しながら、御瀧神社の祭礼と同じ日に法会を行っています。

福聚寺と伊達朝宗夫人墓

福聚寺は、開山時期は不明ですが、光明寺の塔中[※1]であったといわれています。境内には文治5年（1189）の奥州合戦で戦功を上げ、伊達郡の地頭職に任命された伊達氏初代朝宗（常陸入道念西）の夫人の墓が建立されています。夫人は結城氏[※2]の出といわれ、晩年に光明寺の地に隠居し、死後現在の墓地に葬られたと考えられています。

伊達朝宗夫人墓

光明寺は第4代政依が曾祖母である朝宗夫人の菩提を弔うために整備されました。福聚寺は、光明寺移転後もこの墓を守る寺として続いたといわれ、夫人の位牌を安置しています。現在ある墓は、文政4年（1821）に、夫の朝宗の墓（萬勝寺館跡桑折町大字万正寺）とともに、仙台藩により改修されたものです。鎌倉時代をしのぶ代表的な史跡であり、福聚寺は光明寺の存在を今に伝えています。

※1　大きな寺院の山内にある小さな寺のこと。
※2　平安時代末期から戦国時代にかけて、結城（現在の茨城県結城市）を領した氏族。

メモ

民俗芸能

1.内谷春日神社と太々神楽※(町指定無形民俗文化財)

内谷春日神社は、奈良の春日大社から御霊を分けていただいた、四柱の神様が祀られている神社です。文化6年（1809）に、本殿・幣殿・拝殿で構成される社殿が創建されました。

春日神社拝殿

創建から地域の厚い信仰を集める春日神社では、現在も春の祭礼、神楽の奉納、夏祭りなどが行われ、人々に親しまれています。昭和30年（1955）頃までは11月上旬に祭礼が行われていましたが、農繁期と重なったため、五穀豊穣を願う春の祭礼へと変わりました。祭礼では、古くから伝わる太々神楽が氏子たちによって奉納されます。

春日神社神楽殿

神楽奉納は明治14年（1881）、自分たちの村のにぎわいを創りたいと考えた内谷地区の地主の菅野秀五郎と鴨田祐之助が田村郡三春町に出向いた際に神楽を知り、始めたのがきっかけといわれています。私財を投じて三春から招いた舞・太鼓・笛の師匠に、各家の長男15人ほどが出雲系神楽26座を学び習得し、秋の例大祭で初披露しました。

※　江戸時代後期、田村・安達郡で地元の国分大隈という神職が磨き上げた神楽。出雲神楽の田村流（または大隈流）といわれる。「太々」は「素晴らしい」という意味がある。

明治15年から続いた神楽ですが昭和33年（1958）、後継者不足から中断を余儀なくされました。しかし、神楽復活を願う人々によって昭和57年（1982）、「内谷春日神社太々神楽保存会」が結成され、同年春、復活させた神楽の奉納が行われました。昭和59年（1984）、復活を機に、それまで組立式だった神楽殿が現在の場所に建てられました。また、神楽座割（プログラム）などの古文書、楽器、面、衣装などの保存状況も良好だったことから昭和60年（1985）3月、国見町第1号の無形民俗文化財に指定されました。

昭和9年（1934）春日神社祭礼

2.祭礼の準備・神楽奉納

拝殿で行われる事前練習

春季例大祭　玉串奉てん

内谷春日神社太々神楽は、毎年4月の第3日曜日、桜満開の神楽殿で氏子が楽人となって舞を奉納します。保存会が中心となり、およそ2か月前から準備をはじめ、毎週土曜日の昼間は子どもたち、夜は大人が集まって練習します。この時期は、内谷地区に笛と太鼓の音が響きわたり、地域のつながりを深くしていきます。

祭礼当日は、まず神事を行います。総代、町内会の役員、楽人による玉串奉てんの後、お札が出され、おもてなしの温かい汁物がふるまわれ、神楽奉納がはじまります。

3.太々神楽の継承

神楽とは、人々の健康や豊作を願い、神様の心を和ませるために、感謝と祈りをささげる儀式です。日本神話の中に、岩の奥に隠れてしまった神様を外に連れ出すために、もう一人の神様が舞を見せたといわれる「天岩戸（あまのいわと）」という物語があり、その舞が神楽の始まりといわれています。内谷春日神社太々神楽で舞われている座※の一つの「岩戸開（いわとびらき）」も、天岩戸が題材になっています。

ほかにも、両手にろうそくを持ち回転する技などがあり、山伏神楽の系譜を引く「燈明（とうみょう）」や、観客に餅をまいて福を授ける「宇賀（うが）」など、26座の舞があります。

太々神楽は、練習する人たちの動きや音色を、楽譜がないため、人から人へ伝えることで継承されてきました。戦争等による中断と復活や、次世代への伝承を繰り返す中で、平成27年（2015）の時点では26座のうち18座の舞は継承されていましたが、8座の舞が舞うことができなくなっていました。

そこで保存会は、その8座を改めて継承すべく平成28年（2016）から8座の復活へ向けた取り組みを始めました。伝承元の三春地方の神楽の中でも、より春日神社太々神楽に似ている「田村市大倉の太々神楽保存会」と交流し、平成28年度から29年度の2年間で、8座を習い受け、復活させることができました。

田村市大倉の太々神楽保存会の演目指導

100年以上受け継がれている神楽を守り、伝えていこうと、大人と子どもを合わせおよそ30人の楽人が稽古に励んでいます。また、保存会は、多くの人に神楽を知ってほしい、後継者になってほしいという思いから、「子ども太々神楽体験教室」を開き、文化を次世代へと繋いでいます。

神招の舞

※　神楽の演目の呼び方。

メモ

祭　　礼

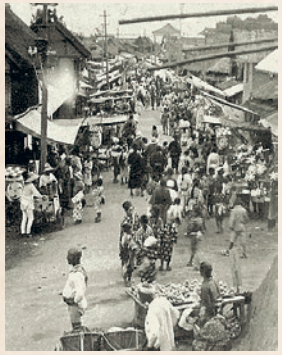
1.鹿島神社と例大祭（町指定無形民俗文化財）

鹿島神社拝殿

鹿島神社は、五穀豊穣や戦勝祈願の神社として信仰されているのに加え、旧藤田宿の発展とともに江戸時代には市での繁盛、さらには旅が盛んになったことから旅の安全も祈願するようになったといわれています。「鹿島神社記」によれば、神社の起源は8世紀頃、現在の社殿から300mほど北に創建されたと記されています。また、源頼朝が文治5年（1189）の阿津賀志山の合戦の際に、藤田宿で戦勝祈願を行ったとも伝えられています。

その後、焼失と再建を経て享保10年（1725）、現在の場所に医薬神社（江戸時代には「明けの薬師」）とともに祀られました。明治14年（1881）には、旧奥羽街道に面する石垣も含めた大規模な改修が行われ、鹿島・医薬の両祭神を祀る拝殿・幣殿・本殿が再建されました。

鹿島神社例大祭は、毎年10月第4金曜日と土曜日に行われる国見町の代表的な秋祭りです。特に鹿島神社、御霊神社、琴平神社（金毘羅神社・こんぴらじんじゃ）、などの各御旅所※1を巡る「神輿渡御※2」と、露店が軒を連ねる旧街道で、神輿と山車が勇壮なかけ声とともにぶつかり合う「もみ合い」は、最大のハイライトです。


昭和初期の例大祭の様子

例大祭のはじまりは明らかではありませんが、弘治4年（1558）「梁川八幡宮祭礼規式」には、中世に長桙や旗桙の風流行列※3が出る祭礼が行われていたと記されています。例大祭で神輿渡御や山車の運行などが行われるようになった起源も不明ですが、鹿島神社の参道となる旧藤田宿の街道沿いには多くの屋台が軒を連ね大勢の人が集まり華やかな例大祭の様子が伺えます。

※1　祭礼の際、神輿巡行の時に休憩する場所ところ。　※2　神輿が進むこと。
※3　悪霊を退散させるため、美しい作り物を身に付けて踊ったり、あるいは山車や屋台などでの歌や囃しを総称して風流といいます。

2.例大祭の準備

お囃子の練習（錦町組）

例大祭は、鹿島神社神職のほか12町会を中心とする氏子および総代、山車を運行する4つの若連、神輿渡御を行う白張により執り行われます。特に若連は、約1カ月の準備期間も含め中心的な役割を果たします。本番に備えて始まる太鼓やお囃子の練習は、4つの若連事務所を会場に午後7時頃から午後9時まで続きます。秋の夜長、藤田の町中に響く軽快な太鼓とお囃子の音色は、人々に例大祭が近いことを知らせます。

3.前夜祭・例大祭

〔前夜祭〕

宮司による祝詞

例大祭の前日は前夜祭が行われます。各町内では、夕方から四町若連による山車のお披露目が始まります。午後7時になると神職と役員が集合し、神社社殿で宮司による祝詞、総代よる玉串奉てんなどの神事が執り行われます。さらに竹駒稲荷神社でお神酒を組み交わすなどの直会※1が催されます。

〔1日目〕

例大祭神事の様子

1日目は、午前11時から本殿で神事が始まり、夜7時になると宮詰の儀が行われます。社殿は、翌日の神輿渡御の安全と無事に還御※2できるようにと願う関係者と若連であふれ、境内にも人々が集まります。神事の後は町内で山車の運行が始まります。

※1　神さまに供えた御神酒や神饌を祭典終了後に下げて参列者で分かち合っていただくこと。
※2　神が神輿渡御から帰ること。

〔2日目〕

2日目は、午前8時に神職によるお祓いと玉串奉てんの後、神輿へ神霊を移す祝詞があげられます。午前9時の打ち上げ花火を合図に神輿が発御※となり、山車はお囃子を奏でながら移動し、神社の石垣付近に勢ぞろいして神輿を迎えます。

神輿渡御では、神輿を台車に乗せ4台の山車と稚児行列が一緒に巡ります。神輿から響く鈴の音、若連が山車を引く時に出る「ヨイヤサー、ヨイヨイヨイヤサー」という元気な掛け声が、お囃子とともにのどかな田園風景に響きわたり、人々の収穫の喜びと感謝はますます高まります。この日のために練習を重ねてきた四町若連による太鼓の演奏が披露され、会場を盛り上げます。

鹿島会によって担がれた神輿が発御

四町若連による太鼓の競演

〔もみ合い〕

夜のとばりが下りる頃、電飾でさらに華やかになった山車が練り歩く旧藤田宿は、郷愁を誘う幻想的な雰囲気をかもし出しはじめます。

午後7時、4つの山車が神輿をはさみ、山車をぶつけ合いなら神輿を神社に送り届けるもみ合いがはじまると祭りは一番の見どころを迎えます。山車が時速30㎞で神輿にぶつかる瞬間の緊張感の後に大歓声が湧きあがります。

午後9時を過ぎると、山車と神輿は、鹿島神社参道付近に集まり、祭りもクライマックスに近づきます。大勢の観衆が見守る中、剣の舞が奉納されると、神輿は太鼓や笛の音色を聞きながら、境内へと続く石段を一気に駆け上がり、午後10時頃に還御となります。その後、若連の解散式とともに例大祭は幕を閉じます。

多くの観衆に見守られる中、神社に向かう神輿

山車で神輿を挟む、山車と神輿のもみ合い

※　神が神輿渡御へ出発すること。

メモ

4.町内の祭り

泉田地区　貴船神社

貴船神社は江戸時代に京都の貴船神社の御分霊を勧請した、二柱の神を祀る神社であり、水の神として地区の信仰を集めています。毎年4月に祭礼が行われており、4年に一度、神輿と山車が地区内を巡ります。

貴船神社祭礼

内谷地区　春日神社

春日神社は奈良の春日神社の御分霊を勧請した、四柱の神を祀る神社です。毎年4月に行われる春の祭礼では、神楽殿において町指定無形民俗文化財の太々神楽の奉納が行われます。また、4年に一度、神輿渡御が2日間行われ、その際山車も繰り出し、子どもたちと地区内を一緒に練り歩きます。

春日神社祭礼

塚野目地区　八幡神社

八幡神社においては、毎年4月には春の祭礼が行われており、太鼓の音が地区に響き渡ります。いくさ神として信仰され、戦争中は戦勝祈願のために八幡様めぐりで賑わいました。また、雨乞いを祈願する祭りが昭和59（1984）年まで行われた記録が残っているなど、水の神様としても地区の住民の信仰を集めている神社です。

八幡神社祭礼

貝田地区　秋葉神社

秋葉神社は火伏の神として広く信仰されています。毎年4月中旬の日曜日に祭礼が行われ、大火が続いた貝田において火伏の神を祀り、家内安全と五穀豊穣を願います。祭礼では、子どもたちによる山車が旧宿場町を中心として、午前と午後の2回巡行します。お囃子は、地元子ども会を中心とした貝田子ども太鼓同好会により受け継がれています。

秋葉神社祭礼

高城地区　国見神社

町内に2箇所ある国見神社のうち1箇所は、現在の大字高城字国見に位置しています。大国主命が祀られ、五穀豊穣、厄除け、家内安全の神として信仰されています。国見山（阿津賀志山）を祀り、大木戸地区（高城・大木戸）を守る神社として創建されました。11月に行われる秋の祭礼においては4年に一度、神輿と山車が地区内を練り歩きます。

高城国見神社祭礼

川内地区　厳島神社

厳島神社は養蚕安全の神として信仰されており、地域の人々からは弁天様と呼ばれ親しまれています。毎年4月に行われる春の祭礼では、山車が繰り出し、子どもたちも参加して地区内を練り歩きます。集会所で行われる直会では、川内ごぼうや豆腐ごはんなどの郷土食がふるまわれます。

厳島神社祭礼

産　　業

1. 国見町の産業

日本は、戦後、生産年齢人口は増加しますが、少子高齢化等社会情勢の変化により平成８年（1995）頃から徐々に減少がはじまります。

国見町の産業構造別就業者数も減少傾向を示しています。昭和60年（1985）以降、平成２年（1990）の6,517人をピークに、平成12年（2000）まで6,000人前半を維持していましたが、平成27年（2015）には4,784人まで減少しています。

産業別にみてみると、第一次産業（農業、畜産、水産、林業等）の就業者数は昭和60年（1985）に1,873人となっていましたが、以後減少を続け、平成27年（2015）は796人となり、半分以下にまで落ち込んでいます。

第二次産業（建設業、工業等）の就業者数は昭和60年（1985）以後、平成2年（1990）の2,430人をピークに、平成12年（2000）まで2,000人前半を維持していましたが、平成17年（2005）の統計で急激に数を減らし、平成27年（2015）は1,302人まで減少しています。

第三次産業（商業、金融業、運輸業、情報通信、サービス業等）の就業者数は昭和60年（1985）の2,311人から、平成17年（2005）に2,846人まで増加し、以後、平成27年（2015）は2,660人まで減少しています。

構成比でみると、昭和60年（1985）は各産業が3割前後の構成比となっていましたが、就業者数の増減から、平成27年（2015）は、第一次産業が16.7%、第二次産業が27.2%、第三次産業が55.6%となりました。第一次、第二次産業の就業者数の減少が著しい一方、第三次産業は僅かながら増加しており構成比が50%を超える結果となっています。

産業別＼年次	総数		第一次産業		第二次産業		第三次産業		分類不能産業	
	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)
昭和60年	6,365	100	1,873	29.4	2,179	34.2	2,311	36.3	2	0.1
平成7年	6,317	100	1,224	19.4	2,385	37.7	2,703	42.8	5	0.1
平成17年	5,487	100	1,060	19.3	1,579	28.8	2,846	51.8	2	0.1
平成27年	4,784	100	796	16.7	1,302	27.2	2,660	55.6	26	0.5

産業別就業者数（資料:平成27年国勢調査（確定値））

	第一次産業(単位：100万円)	第二次産業(単位：100万円)	第三次産業(単位：100万円)
昭和50年度	1,989	2,476	4,602
昭和60年度	2,157	5,256	7,498
平成7年度	1,861	12,229	13,564
平成17年度	1,442	6,222	16,390
平成27年度	1,655	10,694	15,891

産業別総生産（資料：福島県勢要覧）

桃の収穫

農業

国見町は、古くから農業を基幹産業としてきました。その中心となる稲作は、県下でも良質な米ができることから種もみとして生産する農家も数多くあります。作付けされている品種は、コシヒカリが多く、秋の収穫時期になると稲穂が垂れた田園風景が一面に広がり、黄金色に輝きます。

稲作同様重要であった養蚕業は、伊達郡の代表的な産業となり明治・大正と発展してきました。国見町では、徳江・川内・大枝などの平野部に位置する集落で盛んに行われてきました。しかし、蚕飼育の難しさに加え、大正末期に生糸（きいと）価格の乱高下や化学繊維の開発等により価格が下落するなど収入が不安定になると、常に大きなリスクがある養蚕業のほかに、新たな生業を求めるようになりました。

そうした中で、明治後半から昭和初期にかけて、現在に続く果樹生産地へと転換していきました。大木戸の半澤果樹園（はんざわかじゅえん）は、明治20年代終わりから開墾して十数haもの広さを持つ大規模な果樹園の経営をはじめ、サクランボを生産しました。大正期に最盛期を迎え、東京・大阪の大都市へも出荷されました。その後、同果樹園による生産規模は縮小されましたが、同時期に始まった桃・リンゴなどの生産も導入され、徐々に果樹栽培への転換が図られました。

昭和の初めころからあんぽ柿（干し柿）づくりが始まりました。もともとあんぽ柿は、この地方の菓子類の一つとして明治時代から作られてきました。皮を剥（む）いた渋柿（しぶがき）を寒風の中、天日に干し、冬期間の保存食として食べられていました。養蚕業をやめた養蚕住宅の2階部分は広く、風通しも良かったため、養蚕農家はこぞってあんぽ柿づくりに精を出すようになりました。しかし、黒く変色することから広域の流通に乗ることはありませんでした。その後、ゼリーのような食感と宝石のように美しい飴色に仕上がる硫黄燻蒸（いおうくんじょう）あんぽ柿製造方法が確立したことから盛んに製造されるようになり、全国へ出荷できる産業へと変化しました。国見町では大粒の渋柿の蜂屋柿（はちやがき）がよく使われています。

昭和40年代後半になると桑畑からの農地転換で桃の栽培が盛んになりました。凝灰岩類に由来する粘土層が広く分布する国見町は、肥沃な土地と盆地特有の寒暖差の大きさが桃の生育に適していたため、多くの農家が栽培するようになりました。「あかつき」が主力品種であり、現在では全国9位、県内3位の出荷量を誇っています。

国見町の特産品

米　本町は昔から米づくりが盛んで、阿武隈川流域の肥沃な粘質土壌から、８世紀頃には東北有数の条里制による水田が整備された。現在でも県下有数の種場（採種ほ場）として、良質の種もみを生産している。作付されている品種はコシヒカリが多い。秋の収穫時期になると稲穂が垂れた田園風景が一面に広がり、黄金色に輝く。

桃　盆地特有の寒暖差が大きな気候は、国見特産の桃をおいしく育てる。今人気の「あかつき」は福島の果樹試験場（農業総合センター果樹研究所）で生まれ、とてもジューシーで果肉はやわらかく、香り高い風味を誇る。本町を代表する逸品となっている。

あんぽ柿　一つ一つ丹念に皮を剥き、独自の技術で乾燥させると甘み豊かな干し柿（あんぽ柿）ができる。本町では大粒の渋柿、蜂屋柿がよく使われ、あめ色の果肉は、ゼリーのような食感で、自然の甘さは、大地と太陽の恵みを感じさせる絶品である。

サクランボ　厳しい冬を越した果樹は、春一斉に花を咲かせる。そして、果物シーズンの幕開けを告げるのがサクランボである。本町は、山形県東根市より栽培方法を導入以来、サクランボの産地である。主力品種の「佐藤錦」は手間をかけ、雨風をさえぎり、丹念に生産している。大地の恵みと太陽の力をたっぷりと受け、独自の光沢を放ち「紅いルビー」と称される。

	総数（単位:ha）	田（単位:ha）	畑（単位:ha）	樹園地（単位:ha）				その他（単位:ha）
				総数	果樹園	桑畑	その他	
昭和60年	1,202	596	155	450	356	92	2	1
平成7年	1,061	557	133	370	359	11	0	1
平成17年	915	467	74	374	374	0	0	0
平成27年	813	340	137	335	335	0	0	1

経営耕地の推移（資料：2015年農林業センサス）

商工業

平成15年（2003）製造業の事業所数は29 事業所でしたが、平成23年（2011）には19 事業所となりました。業種としては、精密機械製造や繊維工業などでしたが、産業の縮小や海外への進出などにより減少しています。卸売業は平成３年（1991）は23 事業所でしたが、平成24年（2012）には9 事業所に減少しました。また、町内の商店も平成３年（1991）は167 店だったものが、平成24年（2012）には83 店にまで減少しました。その主な要因は、店主の高齢化や大型のショッピングモールなどが近隣市町に出店したことによる来客数の減少と考えられます。

年次	工業
平成15年	29
平成16年	28
平成17年	26
平成18年	25
平成19年	26
平成20年	25
平成21年	24
平成22年	23
平成23年	19
平成24年	23
平成25年	20
平成26年	21

年次	卸売業	小売業
平成3年	23	167
平成6年	15	159
平成9年	14	148
平成 14 年	10	140
平成 19 年	10	124
平成 24 年	9	83

商工業事業所数
（資料：平成 26 年（2014）工業統計調査結果報告書、商業統計調査、経済センサス- 活動調査）

観光

国見町は豊かな自然に囲まれ、全国でも有数の果物の産地です。春には、町内中心部にある観月台公園の桜が満開となり、また平地、丘陵地を問わず桃をはじめ果樹の花が咲き乱れ、奥羽山脈の緑のコントラストと相まみえ、町内一円は桃源郷となります。町のシンボルである阿津賀志山の頂上からは福島盆地を一望することができ、眼下に広がる田園風景は、春を映す鏡のような水面、夏の緑、秋の黄金色へと日々変化しています。９月23 日は「くにみの日」として町全体が義経まつり一色となり、源義経ゆかりのこの町は多くの観光客でにぎわいます。

東日本大震災・原発事故からの復旧・再生のシンボルとして平成29年（2017）5月にオープンした「道の駅国見あつかしの郷」は、ひと・もの・ことについての交流、発見、発信ができる現代の宿駅として多くの来町者が訪れています。平成30年（2018）12月には来場者は300万人を超え、単なる通過点から目的地として新しい観光・交流が生まれています。周遊性の起点となる施設であり、来訪者が増加する夏には案内ブースを設置し観光案内を行っています。

観月台文化センターの桜

2.石蔵と石工技術

採石箇所

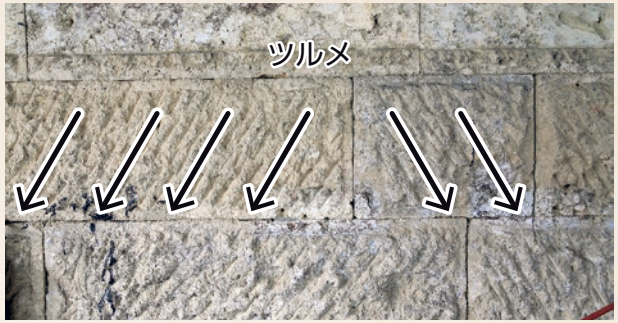
国見町の山のふもとは安山岩・玄武岩・凝灰岩類で構成されています。約20万年前の地殻変動をきっかけにして形づくられた福島盆地の中でも、国見町から桑折町にかけては特に隆起運動が激しかった地帯で、福島盆地西縁断層帯と呼ばれています。いくつもの階段状になった丘（段丘）が形成され、そのため凝灰岩が地上に現れている場所が数多くあり、江戸時代末期から採石が行われていました。その特徴は、やわらかくて加工が容易なこと、火に強いことがあげられます。

国見町採石箇所図　―1990 赤坂正勝「国見石について」『郷土の研究』第38号 国見町郷土史研究会より―を一部改変

主な採石場は12か所あり、昭和30年代後半まで採石は、手掘りの露天平場掘り※1でした。石は採石地名が使われたことから、大字名を頭につけて5つの呼び名で呼ばれていました。昭和15年（1940）頃、すべて国見石に統一されました。

江戸時代には、石碑や間地石（石垣の石）などに利用※2されていました。明治13年頃の国見町には石工10名、大工13名が仕事をしていたという記録があり、木材と同じくらい石材も使われていたことがわかります。

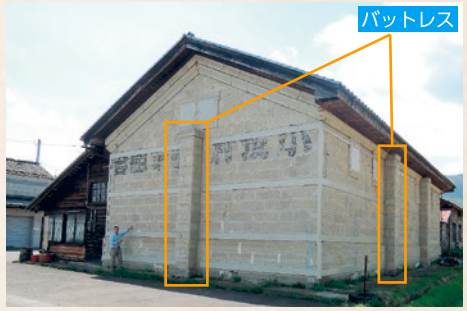
※1　石山の上についている土などを取り除き山の高いところから平場掘りで掘っていく掘り方。
※2　国見石に統一される前は、小坂石、西堂石、山崎石、石母田石、国見石と呼ばれていました。



ツルメ掘　採石は墨壺を使い縦と横に線を引き、縦面と横面をホッキリツルで溝を深めて石を起こしました。そのため15㎝程度の間隔で矢を入れました。これで石を割り、サシパなどで不要な部分を大まかに削りました。表面はツルメ掘仕上げで斜め模様を規則的に入れることで建築物のトーンを作り出しました。

石蔵の変遷

石蔵の建築は、第1次世界大戦（1914～）による大戦景気や養蚕業の隆盛、豪商や豪農の米の備蓄などの地域のニーズとも合致し、町内に留まらず福島市、伊達市、桑折町、宮城県南部まで広まっていきました。さらに昭和5年から同9年（1930～1934）にかけて東北地方は、度重なる冷害で食糧不足になり加工食品の保存などに石蔵が重宝されました。その間、建て主の要望もあり石蔵の延べ床面積は、それまでの約70㎡から100㎡～120㎡になりました。昭和10年から同16年（1935～1941）は、種もみ貯蔵用の郷倉や軍事用備蓄米の保管穀倉の建築も行われ延床面積は280㎡までに増えました。石蔵の大型化に伴い建築方法も改良されました。一方で石材の加工技術は、ツルメ掘加工による手作業が続いていました。その後、昭和30年代後半くらいに加工機械が導入されると表面加工は、すべて機械加工に代わりました。しま模様、平らで滑らかな平滑加工など、画一的なデザインへと移行していきました。



バットレスを設置した旧小坂村産業組合石蔵
国見石を使用。現在も農協倉庫（穀蔵）として利用
昭和16年建築。同じ敷地内に戦前と戦後に建てられた蔵が2棟仲良く並んで建っている。

コラム

建築方法の改良点

①目地隙間なしの石積から目地モルタルに変更。モルタル材を改良するなどして壁面の強度を密封性を高めた。
②切妻屋根に加えて、風に強く水はけのよい寄棟屋根も取り入れるようにした。内部構造も強度を増すために梁ごとに方杖を入れるようにした。
③大型化に伴い壁面を補強するため石積の控壁あるいは、バットレスを設置するようにした。

石蔵建築の先駆者伊藤柳太郎

国見町の石蔵建築の先駆者となった人物が伊藤柳太郎です。明治10年（1877）3月、旧藤田村の石工職人中野政造の次男として生まれた柳太郎は、幼いころより父の手伝いをしながら技術を身につけ、成人すると大工棟梁の伊藤家の養子となり大工技術を習得します。その後、宇都宮市大谷の石工を招き技術を習得すると、大正6年（1917）自宅の敷地に国見石を使った石蔵第1号を建築しました。

伊藤柳太郎（国見町伊藤氏所蔵）

伊藤家石蔵 大正6年に建築。建築費は当時の価格で570円と梁材に記されています。土蔵と比べて工期が短く、費用も比較的安価にできることが魅力となりました。

石蔵の普及

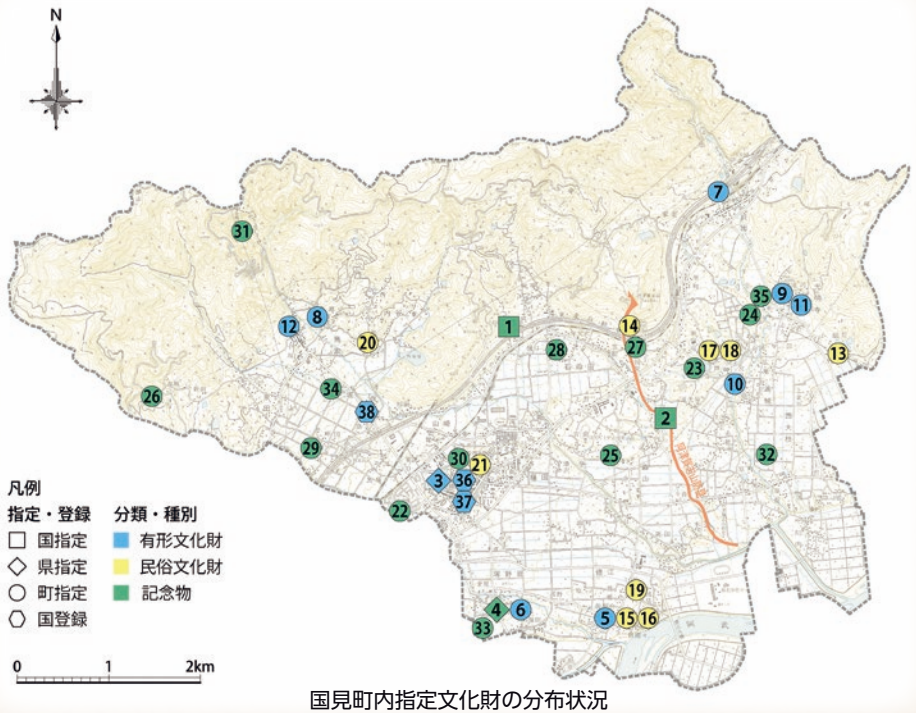
国見町でもかつては豪農や豪商に限られ持つことができた石蔵は、昭和39年（1964）頃からの高度経済成長の波に乗り、ある程度の収入があれば建てられるようになりました。各石材店がストックしていた国見石を使っての石蔵建設は、昭和40年代以降がピークとなります。地元で採れる石「国見石」と伊藤柳太郎が先駆者となった石蔵建築、そして高度経済成長がもたらした恵みによって、町内一円に石蔵が建てられ、国見町ならではの景観を作りました。現在、国見石の採掘はほとんど行われておらず、他所の石材を購入して、石材業を継続しています。

石造住宅
住宅に石を使うことで夏涼しく、冬暖かいというメリットがあったことから蔵とは別に住居用の住宅として建築することもありました。これにより国見町の石材業は、隆盛を極めました。平成26年1月1日現在の家屋台帳によると町内で石造り住宅は28棟となっています。

メモ

国見町指定等　文化財一覧

指別	No.	分類／種別	名称	指定・登録年月日	所在地	備考
国指定	1	史跡	石母田供養石塔	S.10.6.7	石母田字中ノ内	徳治3(1308)年
	2	史跡	阿津賀志山防塁	S.56.3.14(追加指定)H.28.3.1 H.30.10.15	大木戸、石母田、西大枝	文治5(1189)年
県指定	3	重要文化財(建造物)	旧佐藤家住宅	S.47.4.7	藤田字観月台	近世(江戸中期)
	4	史跡	塚野目第一号墳	S.59.3.23	塚野目字前畑	古代(古墳中期)
町指定	5	有形文化財(建造物)	沼田神社本殿彫刻	S.58.3.3	徳江字沼田	弘化年間
	6	有形文化財(建造物)	東大窪八幡神社	H.5.10.1	高城字前	近世
	7	有形文化財(建造物)	貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋	H.25.10.30	貝田字寺脇	明治20(1887)年
	8	有形文化財(建造物)	福源寺地蔵庵観音堂	H.30.3.13	鳥取字鳥取	明治8(1875)年
	9	有形文化財(美術工芸品)	三常院木造阿弥陀三尊仏立像	S.60.3.15	光明寺字鹿野	16 世紀(室町)
	10	有形文化財(美術工芸品)	安養寺一木造薬師如来坐像	H.5.10.1	高城字北	中世(南北朝～室町初期)
	11	有形文化財(美術工芸品)	福聚寺木造虚空蔵菩薩坐像	H.5.10.1	光明寺字沼	中世(15 世紀前半)
	12	有形文化財(美術工芸品)	伊達晴宗判物、伊達政宗書状	S.60.3.15	小坂字小坂	天文18(1549)年 文禄4(1595)年
	13	有形民俗文化財	西大枝深山神社の廻米絵馬	S.58.3.3	西大枝字宮ノ内	慶応元(1865)年
	14	有形民俗文化財	阿津賀志山三十三観音八十八大師画像碑群	S.44.6.30	大木戸字阿津加志山	近世(江戸末期)
	15	有形民俗文化財	沼田神社再建遷宮祝俳諧歌奉額	H.5.10.1	徳江字沼田	明治31(1898)年
	16	有形民俗文化財	沼田神社南藤堂武俊七十齢賀寿俳諧歌奉額	H.5.10.1	徳江字沼田	明治19(1886)年
	17	有形民俗文化財	国見神社宝楽俳諧奉額	H.5.10.1	高城字国見	近世
	18	有形民俗文化財	国見神社奉納算額	H.5.10.1	高城字国見	文久2(1862)年
	19	有形民俗文化財	観音寺観音堂汽車絵馬	H.5.10.1	徳江字団扇	明治25(1892)年
	20	無形民俗文化財	内谷春日神社太々神楽	S.60.3.15	内谷字舘脇	明治15(1882)年
	21	無形民俗文化財	鹿島神社例大祭	H.26.12.15	藤田字北	
	22	史跡	堰下古墳	S.48.3.10	泉田字堰下	古代(古墳中期)
	23	史跡	大木戸窯跡	S.48.3.10	大木戸字中野窪	古代(8世紀前半)
	24	史跡	岩淵遺跡	S.51.2.26	高城字岩渕	原始(縄文中期)
	25	史跡	森山第四号墳	S.60.3.15	森山字上野薬師	古代(古墳終末期)
	26	史跡	半田銀山二階平坑口跡	S.60.3.15	泉田字二階平	嘉永7(1854)年
	27	史跡	旧奥州道中国見峠長坂跡	S.60.3.15	大木戸字長坂	近世
町指定	28	史跡	石母田城跡	S.60.3.15	石母田字舘ノ内	中世
	29	史跡	泉田小学校跡	H.5.10.1	泉田字立町	明治6(1873)年
	30	史跡	藤田城跡	H.5.10.1	山崎字宮舘	中世
	31	史跡	旧羽州街道小坂峠道跡	H.5.10.1	鳥取字峠下	近世
	32	史跡	王壇古墳	H.5.10.1	西大枝字王壇	古代(古墳終末期)
	33	史跡	塚野目城跡	H.25.10.30	塚野目字舘前	中世
	34	天然記念物	深山神社の大榧大藤	S.49.3.1	鳥取字深山	樹齢 500 年以上
	35	天然記念物	御瀧神社の湧水	H.5.10.1	光明寺字滝沢	
国登録	36	登録有形文化財(建造物)	奥山家住宅主屋	H.10.4.21	藤田字北	大正 10(1921)年
	37	登録有形文化財(建造物)	奥山家住宅洋館	H.10.4.21	藤田字北	大正 10(1921)年
	38	登録有形文化財(建造物)	旧小坂村産業組合石蔵	H.28.8.1	内谷字西堂	昭和 16(1941)年



国見町内指定文化財の分布状況

平成30年度文化庁文化芸術振興費補助金
（文化遺産総合活用推進事業）

編集：国見町歴史まちづくりフォーラム
〒969-1792　福島県伊達郡国見町大字藤田字一丁田二1番7
Tel：024-585-2967
http://www.town.kunimi.fukushima.jp